

# ユーゴ国家における諸民族和解の試みとその挫折

材 木 和 雄

## 1 問題の所在

ユーゴスラヴィアのセルビア人とクロアチア人の対立は1990年代前半の内戦報道によって広く知られるようになったが、その起源や原因についてはまだ一般にはよく知られていない。加えて、この地域の複雑な歴史と民族構成は人びとを思考停止に追い込み、ステレオタイプ的な見方の提示で納得してしまうことも多いと思う。たとえば、内戦が発生した当時によく引き合いに出されるのが「民族の怨念」説である。以下の文章は、「ボスニア紛争は人類の悲劇だ」と題する新聞の論説記事の一部であるが、戦争が終わって10年が経過した現在でもなおこのような見方は消えてないのではないだろうか。

「ユーゴには国家という概念が国民にまるでなく、強い民族意識が常に底流にある。多数の民族、言語、宗教が複雑にからみ、その歴史はあくまで多様性とむき出しの対抗意識だ。民族間の暴力と報復の繰り返しがこの国の潮流であり、第2次世界大戦終了後も戦火は絶えなかった。戦争がからむ民族の怨念は中世以前にもさかのぼる。一見、時代錯誤とも見える過去の反目が今日の戦闘行為につながっても驚くに当たらない。ボスニアの不幸は故チト大統領が作った民族の平和共存が虚構だと米国はもちろん欧州までもが気がつかなかった事だ。いつの時代も恐怖の統治が終わったとき、虐待されてきたと感じていた少数民族は怒りに走り、過去の償いを求める。バルカン半島の民族が自決に飛びつくのは自然の成りゆきだった」  
（『日本経済新聞』1992年9月15日）。

「中世以前にさかのぼる民族の怨念」があるかはわからないが、ユーゴスラヴィアの民族対立の起源については、1389年の「コソヴォ平原の戦い」

の敗北まで遡るとする説がある。たしかにこの戦いは中世セルビアの没落を決定づけた点でセルビア人にとって屈辱の敗戦である。しかし、この戦争はオスマン・トルコに対する戦いであり、しかもこの戦いではボスニアはセルビアと同盟し、クロアチア、ブルガリア、アルバニア、ハンガリーからも援軍が駆けつけてトルコ軍と戦ったのだから、南スラヴ人同士の間での対立の起源とするのは無理な側面がある。

しかし、いずれにせよ、セルビア人とクロアチア人の対立の歴史はそれほど古いものではない。それはせいぜい19世紀の後半からである。これには当時クロアチアを所領としていたハンガリーの統治政策が大きく影響していた。なかでも、1883年から20年間にわたりクロアチア総督を務めたマジャール人貴族のクエン＝ヘーデルヴァーリが少数派のセルビア人を重用したり彼らに特権を認めたりすることによって、クロアチア人との対立と反目をあおり、統治に利用したことが大きかった。

しかし、上述のセルビア人とクロアチア人の対立は旧オーストリア＝ハンガリー領時代のクロアチアの中での対立である。ユーゴスラヴィアは1918年にオーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人諸地域と旧セルビア王国とが合体して形成されたが、その建国以前には旧オーストリア＝ハンガリー領のクロアチア人と旧セルビア王国領のセルビア人とは全体的には没交渉に近かった。両者が日常的な交際を始めるはユーゴスラヴィアの建国後である。したがって、建国以前には両者の対立は起こりえなかった。さらに建国以前の対立の影響をあまり強調すると、ユーゴスラヴィアという国がなぜ誕生したのかが説明できなくなり、問題である。イラクのような人工国家とは異なり、ユーゴスラヴィアは南スラヴ人自身が望んでできた国家であった。したがって、セルビア人とクロアチア人の対立の主要な起源はやはり統一国家の形成後の期間に求めなければならない。

実際、統一国家形成後の数年間は旧来の地域の垣根を越えてセルビア人とクロアチア人の二極分解が進行した。その発端は統一国家の国家制度をめぐる見解の相違であった。

クロアチア側は、セルビア王国との国家統合の際、憲法制定議会在最終的に憲法と国家のあり方を決定するまでの過渡期の間は、各地方の自治権が従来どおりに維持されることを求め、それはセルビア政府代表も了解したと考えていた。したがって、統一国家は少なくとも当分の間、単一国家ではあるが連邦制に近い国家形態をとるとクロアチア側は思い込んでいた。しかし、セルビア側代表はそのような了解をした覚えはなかった。これはそのとおりであり、実際に何の協定文書も存在しなかった。むしろ、セルビア側は、旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人諸地域をセルビア王国の中に統合しようとする彼らの国家構想が暗黙の承認を得たと考えていた。国家形態をめぐる同床異夢は、当時の力関係によってセルビア側の主導権によって決着がつけられた。彼らは旧セルビア政府に権限が集中する行政機構をすばやく構築し、1921年制定の憲法（ヴィードヴダン憲法）によって君主制を前提とする中央集権的な単一国家を基礎付けた。

この間、中央政府の政策に抵抗する動きは、治安当局により徹底的に弾圧された。しかし、政府にとって手ごわい反対勢力になったのは、クロアチア人の支持を集めて躍進したクロアチア共和農民党である。その党首のステパン・ラディッチは旧オーストリア＝ハンガリー領南スラヴ人政治指導者の会議でセルビアとの国家統合に反対票を投じた唯一の人物であった。彼は統一国家の形成には反対ではなかったが、準備不足を理由に異議を表明した。ラディッチは統一国家の誕生後も国家統合をクロアチア議会が承認していないことを理由に、新国家に正当性を認めなかった。クロアチア共和農民党は政体としては共和制を主張する立場をとり、国家制度についてはクロアチアに国家主権を認めた連邦制国家への再編を求めて、セルビア人代表との民族間協定の締結を政治目標とした。

クロアチア共和農民党は1920年の憲法制定議会選挙で四番目に大きな議席数を獲得しながらも議会を欠席し、議会に参加するかどうかを政権与党との交渉カードとする戦術をとった。しかし、1923年の選挙で議席を伸ばしたクロアチア共和農民党はやがて議会闘争に転じ、1924年3月には、民

主党、スロヴェニア人民党、ユーゴスラヴィア・ムスリム機構の三党連合と連携して反政府連合を形成し、7月末には急進党政権の打倒に成功した。民主党のリュバ・ダヴィドヴィッチを首相とする新政権は、前政権の腐敗と暴力を一掃すると共に、諸民族の相互理解と寛容をスローガンに掲げ、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の民族間協定の締結に道筋を付けることを課題とした。これは近い将来に憲法の修正をおこなうことを意味していた。ところが、この政権は国王に疎んじられたためにわずか二ヶ月半で倒れ、急進党が政権に復帰した。政府はまもなくクロアチア共和農民党に治安維持法を適用し、党幹部を逮捕・拘束して党活動を停止させた。

クロアチア人の抵抗運動は手詰まりに陥ったが、1925年春に劇的な転換が生じた。国家の安定を望む国王の調停により、ラディッチらは共和主義と連邦制の主張を放棄して現行の憲法と国家制度を承認する立場に転向し、急進党と政策協定を結んで政権に参加することになったのである。ここに初めてセルビア人とクロアチア人は政治的に和解した。ところが、この和解は長続きしなかった。政権を握る急進党はラディッチらに閣僚ポストを分け与えたが、政策協定で約束した政策を何一つ実行しなかった。このため、これを不満としたクロアチア農民党は政府批判を強め、結局再び野党に転じた。

1927年の総選挙で敗北したラディッチはこれまで敵対関係にあった独立民主党のプリビーチェヴィッチと手を結んで「農民・民主連合」を結成し、急進党を中心とする与党連合の一角を切り崩して多数派形成をねらう戦術に出た。彼らは1928年の2月、民主党の協力を得ていったんは倒閣に成功したが、国王の支持を背景に与党連合は政権を持ちこたえた。このあと議会は、与党四党（急進党、民主党、スロヴェニア人民党、ユーゴスラヴィア・ムスリム機構）と農民・民主連合を中心とする野党勢力とが厳しく対決する構図になった。農民・民主連合は論戦には強かったが、数の上では与党にかなわなかったため、次第に議事妨害を主要な戦術とするように

なった。議会の審議では罵声の応酬が連日のように続き、乱闘騒ぎもしばしば起こった。

1928年6月20日、議会の論戦は信じられない事態に発展した。発言中の一人の与党議員が野党席からの野次に激怒して隠し持っていた拳銃を取り出し、演壇を降りて野党議員を次々と狙い撃ちにしていったのである。この結果、二人の議員が即死し、三人が重傷を負った。5名はいずれもクロアチア農民党の議員であり、重傷者の一人は党首のステパン・ラディッチであった。常軌を逸した蛮行に走った人物はモンテネグロ選出の急進党議員であり、セルビア人であった。与野党の間に険悪な雰囲気支配していたとはいえ、言論の府である議会の場で、しかも審議中に国会議員が対立する陣営の議員に拳銃を撃ち込んでこれを殺傷するなどということはヨーロッパの議会史上前例を見ない出来事であった。

事件は国中を震撼させた。農民・民主連合は議会をボイコットし、首都ベオグラードを引き上げた。彼らは事件を組織的な犯行と断じて与党の責任を追及し、議会の解散と自由な選挙が実現しない限り、議会には戻らないとした。ところが、与党側は事件を個人的な犯行とみなし、農民・民主連合側の要求にはまったく応じなかった。ゼロ回答の提示を受けた農民・民主連合は態度を硬化させた。8月1日に彼らは決議を採択し、憲法改正と国家制度の変更を求めるとともに、セルビアの諸政党とは今後いっさい交渉をしないと宣言した。なお8月8日、ラディッチは事件の後遺症により死亡した。

6月20日の事件は単に残虐な犯罪というだけではない。それはこの国の議会制度の行き詰まりを示していた。犯行に及んだ人物は前年の総選挙で初当選した議員であった。このとき与党の急進党は党内対立のため分裂選挙の選挙区が多く、政権を握る主流派は治安機関をフルに動員し、野党の選挙妨害や買収、票の移し替えなどなりふり構わぬ不正を尽くして票をかき集めた。主流派は反対派に対立候補をぶつけたために大量の新人議員が当選したが、その中にはラジカルな行動も是とする右翼的人物も多数含ま

れた。第一次政界大戦の古参兵士であった犯人はまさにその一人であった。かねてから与党側の選挙違反を糾弾していた農民・民主連合は、事件後にはこのような議員から構成される国民議会を即刻解散し、選挙のやり直しを求めたのである。

ところが、与党側は政権の維持のみを考え、この要求を突っぱねた。それは農民・民主連合、とくにクロアチア人政治家のセルビアの政党に対する不信を決定的にした。その結果、彼らはセルビアの諸政党に絶縁宣言を突き付け、国王の直接関与による解決のみに成果を期待した。彼らは「今やこの国には国王と国民しか存在しなくなった」というラディッチの残した標語を繰り返し、国王の行動を待った。しかし、このような態度は、彼らの意図に反し、国王独裁制の呼び水となった。6月20日の事件後すでに独裁制のアイデアを示唆していた国王はその後慎重に準備を進め、機が熟したのを見て、憲法の停止と議会の解散を命令した。1929年1月6日のことである。まもなくすべての政党は解散され、国王独裁制が始まった。

統一国家形成後に起こった問題としてよく強調されるのは第二次世界大戦中に起こった民族間抗争である。とくにクロアチア人ファシスト団体ウスタシによるセルビア人の大量虐殺やこれに対するセルビア人民族主義集団チェトニクによる報復行為は有名である。この間の暴力と報復の応酬は両民族にとって消そうと思っても消せない記憶になった。しかし、統一国家形成後の20年以上の歴史を無視し、いきなり第二次世界大戦中に話が飛ぶのは問題である。やはり対立の経緯は順を追ってたどっていく必要がある。

波瀾万丈のユーゴスラヴィアの歴史の中でも1928年6月20日の事件は第一級の衝撃的な出来事なので、これに触れない通史書はない。だが、いずれも簡単な事実の指摘にとどまっている。しかし、ユーゴスラヴィアの民族対立、とくにセルビア人とクロアチア人の対立の起源を知ろうとする場合、事件の背景や意味を検討することは避けて通れない作業である。本稿は、6月20日の事件から国王独裁制の導入に至る期間を、1920年代のユー

ゴスラヴィアにおける「諸民族和解の試みと挫折」の最終局面としてとらえ、その経緯を1927年後半にさかのぼって明らかにする。

## 2 第4回総選挙と「農民・民主連合」の成立

1927年4月に発足したヴェラ・ヴキチェヴィッチを首相とする急進党と民主党との連立政権には不自然な点があった。この内閣は選挙管理内閣ではなく通常の内閣であったので、国民議会を開いて議会に説明責任を果たす必要があった。ところが、国民議会は内閣の発足と同時に閉会となったために、ヴキチェヴィッチ内閣は議会で信任を受ける機会を一度ももたずに政権運営を続けていたのである。これは憲法違反の状態だと野党側、とくにプリビーチェヴィッチの独立民主党は強く抗議した。しかし、急進党のヴキチェヴィッチにせよ、その同盟者である民主党のマリンコヴィッチにせよ、それぞれの所属政党の内部を完全に掌握しておらず、彼らにとって議会を開いて信任投票に応じることは危険が大きかった。与党内部から足を引っ張られる恐れが十分にあったからである。そこで予想されたことではあったが、野党と世論の批判をかわすため、ヴキチェヴィッチは国王に国民議会の解散を求めた。1927年6月15日、国王はこれに応じて、国民議会の解散と総選挙の実施を告げる勅令に署名した。投票日は3ヶ月後の9月11日、新しい議会の召集は10月5日とされた。政権は選挙管理内閣に移行した。結局、国王はヴキチェヴィッチに6ヶ月近くも議会の監督を受けることなく政権運営を続けることを許可したのであった。

ヴキチェヴィッチらは与えられた時間を利用し、与党内の基盤固めをおこなう一方で新たな政権協力者を求めた。最大の成果は7月10日に成立したスロヴェニア人民党との協力協定であった。スロヴェニア人民党党首のコロシェッツは現政権を支持し、総選挙の後に急進党との連立政権に参加することに同意した。その見返りとして、ヴキチェヴィッチはスロヴェニア人の自治権を拡大するため、二つの法案の提出を約束した。一つは「行

政区の自治権に関する法律」であり、これによって行政区により多くの自治権限、とくに財政上の自主権が付与されることが予定された。もう一つは行政区法の改正案であり、それによって二つに分かれているスロヴェニアの行政区を一つに統合することが予定された<sup>1</sup>。政権にとってスロヴェニア人民党の取り込みは野党を分断し、クロアチア農民党を孤立させるねらいもあった。コロシェツはこの期待に応え、選挙運動の期間にラディッチの政治的態度を批判し、スロヴェニア人民党とクロアチア農民党との連携は選挙後もあり得ないことを宣言した<sup>2</sup>。

総選挙は党勢拡大を狙うクロアチア農民党にとっては望むところであった。同党は直ちに選挙運動に取りかかり、各地に遊説部隊を送り出した。今回、クロアチア農民党はセルビア南部のマケドニアでの議席獲得を狙い、党幹部を遊説に派遣した。ベオグラード政府の支配に不満をもつアルバニア人やトルコ人の支持を得ることが目的であった。ラディッチ自身も精力的に地方遊説をこなした。彼は今回の選挙はセルビア人とクロアチア人の闘いではなく、勤労農民とベオグラードの支配層との闘いであることを各地で訴えた。しかし、クロアチア農民党のセルビアへの進出はこの地を牙城とみなす急進党側の激しい反発を招いた。マケドニアに派遣されたクロアチア農民党の遊説部隊は治安機関を使った妨害工作や急進党支持者の襲撃に遭遇し、撤退を余儀なくされた<sup>3</sup>。ベオグラードで予定されていたラディッチの演説会は急進党員の妨害によって中止になった<sup>4</sup>。結局、クロアチア農民党は今回の選挙ではセルビアへの本格的な進出を断念した。同党はマケドニアでは民主党と農業者党の候補者名簿への投票を有権者に呼びかけ、ベオグラードの選挙区に試験的に候補者名簿を提出するにとどめた。

1927年9月11日、第4回総選挙が実施された。今回の選挙では、3375593人の有権者のうち、2324676人が投票した。投票率は前回は8%下回り、68.9%であった。全国33の選挙区に28の政党と政治集団が候補者名簿を提出したが、そのうち議席を獲得したのは14の政党と政治集団であった。主

な政党の得票数、得票率、獲得議席数は次のとおりである。

表1 1927年9月11日の国民議会選挙結果

| 政 党         | 得票数     | 得票率%  | 議 席 |
|-------------|---------|-------|-----|
| 急進黨         | 742111  | 31.9  | 112 |
| クロアチア農民党    | 376750  | 15.8  | 61  |
| 民主党         | 381784  | 16.4  | 59  |
| ユーゴ・ムスリム機構  | 58623   | 2.5   | 9   |
| 民主同盟        | 78703   | 3.1   | 11  |
| 独立民主党       | 199040  | 8.6   | 22  |
| スロヴェニア人民党   | 106247  | 4.1   | 20  |
| 農業者党        | 136076  | 5.9   | 9   |
| ドイツ人党       | 49849   | 2.1   | 6   |
| クロアチア・ブロック  | 45218   | 2.0   | 2   |
| クロアチア大衆党    | 31746   | 1.4   | 1   |
| 社会民主党       | 24035   | 1.0   | 1   |
| スロヴェニア農民党   | 9900    | 0.4   | 1   |
| モンテネグロ連邦主義党 | 5153    | 0.2   | 1   |
| 共和主義労農同盟    | 43114   | 1.9   | 0   |
| マジヤール人党     | 3359    | 0.2   | 0   |
| ルーマニア人党     | 4654    | 0.2   | 0   |
| 投 票 総 数     | 2324676 | 議 席 計 | 315 |

今回の選挙でも、1位と2位の顔ぶれは変わらなかった。与党の急進黨は旧セルビア王国地域を中心に議席を獲得して第一党の地位を守り、クロアチア農民党は旧オーストリア＝ハンガリー領での獲得議席に基づいて第二党の地位を維持した。しかし、前回の選挙と比べると、両党は得票数、議席数をかなり減らした。とくに急進黨は得票数よりも議席数の減少が著しく、前回と比べ31（22%）の議席を減らした。これは、党内の派閥対立を背景に複数の候補者名簿が同一選挙区に提出され、分裂選挙となった選挙区が多かったからであった<sup>5</sup>。首相のヴキチェヴィッチはこの選挙を自派閥の議員を増やすとともに反対派に打撃を与える機会ととらえ、まったく調整に動かなかった。これに対し、相打ちになった急進黨候補者の議席を奪って大きく躍進したのがもう一つのセルビア人政党の民主党である。民主党は単独の候補者名簿では22議席（前回比60%増）も議席を増やし、ユーゴスラヴィア・ムスリム機構との合同候補者名簿での獲得議席を加え

るとクロアチア農民党と同じ議席数（61議席）となった<sup>6</sup>。

クロアチア農民党は得票数の減少が著しく、前回得票の31%にあたる168716票を失った。とくに地盤とするクロアチア・スラヴォニアの選挙区では約13000票も減らし、得票率は46.7%と初めて過半数に達しなかった。これはこの2年間にクロアチア農民党の指導部がとった行動に信任を与えなかった有権者が多かったことを示していた。しかし、クロアチア農民党は得票数こそ大きく減らしたものの、議席数は6議席減（9%）にとどまった。彼らはスロヴェニアでの3議席すべてを失い、ボスニア・ヘルツェゴヴィナとダルマチアで議席を減らしたが、クロアチアでは前回と同じく45議席を維持した。これは指導部の方針を不信任としたクロアチア農民党の支持者の多くは「棄権」の形で不満を表明し、他党に批判票を投じることが少なかったからであった。ラディッチと対立して党を離脱したニコラ・ニキッチのグループはクロアチア人有権者にまったく支持されず、政界から消滅した<sup>7</sup>。

その他の政党では、独立民主党（1議席増）、スロヴェニア人民党（変わらず）、ドイツ人党（1議席増）は前回とほぼ同じ議席を確保した。ユーゴスラヴィア・ムスリム機構は民主党との選挙協力が奏効し、マケドニアで初めて議席を獲得し<sup>8</sup>、全体でも3議席増となった。農業者党はボスニア・ヘルツェゴヴィナでセルビア人農民の急進党への批判票を吸収して躍進し、前回比5議席増の9議席を獲得した。クロアチア農民党と合同会派を結成したモンテネグロ連邦主義党は、綱領の放棄を有権者に疑われて得票を減らし、3議席から1議席に後退した<sup>9</sup>。政治活動を禁止されていたユーゴ共産党は共和主義労働同盟の名で候補者名簿を提出し、全体的に政権への批判票を集めたが、議席の獲得には至らなかった。

総選挙の結果、急進党、民主党、ユーゴスラヴィア・ムスリム機構の与党三党は過半数を上回る182議席を得た。これに政権協力を約束するスロヴェニア人民党とドイツ人党などの議席を加えると209議席に達し、連立与党は総議席の3分の2に近い議席を確保した。ヴキチェヴィッチ首相は

続投し、9月21日に小幅な内閣改造をおこなった。ヴキチェヴィッチは政権基盤を固めたように見えた。しかし、大きな問題は政権を支える急進党と民主党が依然として内部に反対派や不平分子を抱え、一枚岩ではなかったことである。急進党の中では、多くの古参幹部が落選してパシッチ派などの反対派は衰退する一方で、一人勝ちしたヴキチェヴィッチ派は最大派閥に躍進した。しかし、ヴキチェヴィッチは成り上がり者の党幹部であり、かつてのニコラ・パシッチのように党内に規律と団結を貫徹させる権威を持ち得なかった。党勢を回復した民主党では、政権の座に執着するヴォヤ・マリコヴィッチのグループと、ヴキチェヴィッチ政権の反議会主義的な手法に批判的な党首のリュバ・ダヴィドヴィッチのグループとの対立が継続し、その帰趨は政権の運命を左右する最大の不安定要素となった。

このような事情から、野党陣営に残されたクロアチア農民党と独立民主党は次なる政権戦略として共に民主党のダヴィドヴィッチ派との連携を模索した。注目すべきは独立民主党である。1925年7月に急進党に切り捨てられ政権の座から去って以来、彼らはどの政党とも連携しない自主独立路線をとってきた。しかし、初めて野党の立場で臨んだ今回の選挙で政権側からの選挙妨害を経験し、孤立路線に限界を感じた党首のプリビーチェヴィッチは急進党政権の打倒をめざし、野党連合の結成に動いた。9月21日、クロアチア農民党のラディッチは新しい共闘組織の結成に向けて民主党と交渉をおこなっていることを明らかにした。この組織には民主党、クロアチア農民党、ユーゴスラヴィア・ムスリム機構、独立民主党、農業者党、汚職に手を染めていない急進党の反主流派議員を糾合することがめざされた。ラディッチはこの組織を「議会主義連盟ないし民主主義・農民ブロック」と呼んだ。彼は後に開かれた同党の議員クラブの会議でその議長には民主党のダヴィドヴィッチが就任し、来るべき国民議会の場でヴキチェヴィッチ政権打倒の行動を起こすと明かした<sup>10</sup>。

議会主義と民主主義を前面に打ち出した共闘組織の結成はダヴィド

ヴィッチの求める政治路線に合致し、彼はこの交渉に前向きで臨んでいた。彼はクロアチア農民党と交渉する一方で、独立民主党との合同交渉をおこなった。しかし、この交渉の過程では両党の思惑の違いも浮かび上がった。独立民主党は民主党から分かれた政党であったので、ダヴィドヴィッチは独立民主党のメンバーが民主党に復党することを望んだ。しかし、独立民主党側はこのような合同の仕方には反対であった。彼らは、独立民主党は2度の選挙を通して国民の間に定着した存在になっていると主張し、独立した二党間の合同という形式を求めた。しかし、最大の問題は、ダヴィドヴィッチがまず独立民主党と民主党との合同を先行させたいと考えたのに対し、独立民主党側は、民主党との合同の前提として、急進党政権から民主党が離脱することを求めたことだった。これには政権に陣取るマリコヴィッチ派の抵抗が予想され、党首のダヴィドヴィッチにとっても直ちに同意できない問題であった。

民主党との交渉を続ける一方で、独立民主党とクロアチア農民党の二つの政党は急速に接近した。両党の関係を仲介したのはモンテネグロ連邦主義党のセクラ・ドルレヴィッチであり、ラディッチは彼を代理人としてプリビーチェヴィッチとの交渉をおこなった。その成果を政界に強烈に印象づけたのが10月4日に実現したラディッチとプリビーチェヴィッチのトップ会談である<sup>11</sup>。これはすでに両党の間に協力関係が成立していることを意味した。このあとラディッチは民主党のダヴィドヴィッチとも正式に会談をおこなった。この会談に良い感触を得たラディッチは「民主主義の実現をめざす議会主義連盟は事実上出来上がった」と発言した<sup>12</sup>。プリビーチェヴィッチもまたダヴィドヴィッチとの交渉の進展に楽観的な見通しをもっていた。彼は、ダヴィドヴィッチは民主主義を実現するという信念を通すだろうとラディッチに伝え、また10月18日には民主主義ブロックは理念の上では完成したと発言した<sup>13</sup>。

しかし、急進党は、当然のことながら、連立政権を構成する民主党が倒閣をめざして野党と交渉を始めたことを黙って見ていなかった。首相のヴ

キチェヴィッチは、内閣の一員である民主党のマリンコヴィッチとユーゴスラヴィア・ムスリム機構のスパホに対し、ダヴィドヴィッチの企てを阻止するように指示した。これを受けてマリンコヴィッチとスパホは、民主党とユーゴスラヴィア・ムスリム機構の共闘組織である民主同盟の会議の場でダヴィドヴィッチの計画を挫こうとした。ダヴィドヴィッチ派の影響力が強い民主党の総務会と異なって民主同盟の議員総会には政権の座を失いたくないと考える議員が多く、マリンコヴィッチらの主張が通りやすかったからである。10月10日に開催された民主同盟の議員総会では、野党との共闘を求めるダヴィドヴィッチと政権参加の継続を求めるマリンコヴィッチらの意見が激しく対立した。その結果、自分の考えが受け入れられなかったダヴィドヴィッチはこれ以上議長職を続けられないと述べて辞表を提出するとともに、政界引退の意思を明らかにした。しかし、議員総会はダヴィドヴィッチを引き続き議長として信任すると同時に民主同盟代表の閣僚留任を承認する結論を出して、問題の決着を先送りにさせた<sup>14</sup>。

国民議会の審議はすでに始まっていたので野党は共闘組織の結成を急いだ。1927年10月22日、民主党に決起を促すため、クロアチア農民党のラディッチ、独立民主党のプリビーチェヴィッチ、農業者党のヨヴァン・ヨヴァノヴィッチは連名で合同会派の結成を呼びかける書簡を民主同盟の執行部に宛てて送った。書簡には合同会派の目的が記されていた（法律と憲法の遵守による国家の民主化の実現、広範な地方自治の実現、課税方式の統一と平準化、ダルマチアの農業問題の解決など）が、それらはいずれも民主同盟が掲げる基本政策に一致していた。この書簡はダヴィドヴィッチが承認した上で送付され、公表された。彼は世論の支持を期待し、それを追い風に民主同盟に路線転換を促そうと考えたのである<sup>15</sup>。

10月25日、民主同盟は議員総会を開き、この提案を審議した。民主同盟の議員総会は前回の会議でダヴィドヴィッチの辞意を翻意させようとして、ダヴィドヴィッチを議長として信任し、あらゆる問題に関して彼の決定的な発言権を認めるとの決議を採択していた。したがって、ダヴィド

ヴィッチが執行部の方針として野党側からの呼びかけを受け入れると提起すれば、議員総会はこれを拒否できないはずであった。しかし、マリコヴィッチらは巧妙な作戦で野党との協力関係の実現を阻止しようとした。彼らは次のような決議を総会で採択させることに成功した。それは、野党が呼びかけた統一的な議会主義ブロックの形成を原則的に受け入れると述べる一方で、民主同盟は連立政権のパートナーである急進党と協議をおこなう義務を負っているとして具体的な行動に関する決定を回避する内容になっていた。これは総論賛成でダヴィドヴィッチの顔を立てながら、実質的には野党の呼びかけを却下しようとする結論であった。10月26日、ダヴィドヴィッチはラディッチ、プリビーチェヴィッチ、ヨヴァノヴィッチに返信を送り、民主同盟の決議の内容を伝えるとともに、不本意ながら民主主義ブロックへの参加が困難になった事情に理解を求めた<sup>16</sup>。

民主同盟を加えた共闘組織の結成が不可能な情勢になったので、クロアチア農民党と独立民主党は次善の策として、とりあえず両党だけで共闘組織を発足させることにした。ラディッチは両党が取り組むべき共通の政策をとりまとめ、モンテネグロ連邦主義党のドルレヴィッチを介してプリビーチェヴィッチに送った。独立民主党はこの提案を原則的に受け入れ、クロアチア農民党と合同会議を開催することに合意した。11月11日、クロアチア農民党と独立民主党の所属議員は一堂に会し、合同会派の結成を満場一致で決議した。新会派の名称は「農民・民主連合」であった。彼らはこれを10月22日に民主同盟に呼びかけた民主主義ブロック形成に向けた第一歩と位置づけた<sup>17</sup>。

クロアチア農民党と独立民主党は強固な同盟関係を築くことをめざして、次のような取り決めをおこなった。それによれば、(1)農民・民主連合は毎月一回定例会議を開き、ラディッチとプリビーチェヴィッチが交代で議長を務める。(2)クロアチア農民党と独立民主党はそれぞれ4人のメンバーを出して執行部を形成し、国民議会での統一行動を決定する。(3)クロアチア農民党と独立民主党の議員クラブと党組織はこれまでどおり存続す

る。(4)しかし、両党は単独ではいかなる政権にも参加しないことを互いに誓約する。ただし、民主主義、議会主義、対等同権を志向し、これまでの政治制度の変革を意図するような政権が成立した場合には、農民・民主連合はそれ自体一つの全体として政権に加わることが許されるとする。(5)これ以外の場合において、クロアチア農民党と独立民主党はいかなる政党、会派とも個別に協定を締結することができない<sup>18</sup>。

ラディッチとプリビーチェヴィッチの同盟関係の成立は、当時の人びとにとっては驚嘆すべき政治的事件であった<sup>19</sup>。両者の過去の政治的主張と猛烈な反目関係を考えると、この二人が盟約を結ぶとは到底考えられなかったからである。第一にクロアチアの民族的独自性を擁護し、連邦制的な国家形態への変更を求めたラディッチと、ユーゴスラヴィア人という単一の国民への統合をめざし、中央集権主義的な国家機構の建設を推進してきたプリビーチェヴィッチとはまったく相容れない政治的主張をもっていた。第二にラディッチとクロアチア農民党は政権側からたびたび弾圧を受けてきたが、これには政権中枢にいたプリビーチェヴィッチとその同調者がことごとく関与していた。ラディッチらにとっては、プリビーチェヴィッチと独立民主党は憎むべき仇敵であった。その逆にプリビーチェヴィッチにとっては、ラディッチらはもつとも忌まわしい政治的敵対者であった。クロアチア農民党と独立民主党はともにクロアチアを地盤とする点でも競合関係にあった。

両者が過去の経緯を水に流して手を結んだのは、ひとえに急進党と対抗するためであった。実は過去二年間の間にクロアチア農民党と独立民主党は客観的に立場が接近し、似たような境遇に置かれていた。第一にクロアチア農民党は1925年に現行の憲法と君主制を承認する立場に転換しており、これによって現行憲法とこれが保障する議会主義と民主主義の擁護の点で独立民主党と立場を共有することが可能になった。第二に政府は建国以来旧セルビア王国領と旧オーストリア＝ハンガリー領との間にあった不公平な税制を放置し、旧オーストリア＝ハンガリー領の国民は多くの税負

担を強いられていた。これにはプリビーチェヴィッチの支持基盤であるクロアチアのセルビア人も大いに不満を抱いていた。そのため、クロアチア農民党と独立民主党は旧オーストリア＝ハンガリー領の国民の利益を擁護する点で共通の立場に立つことができた。第三に独立民主党とクロアチア農民党は相前後して急進党と連立政権を構成し、急進党と対立して政権離脱を余儀なくされた。その結果、自分たちは急進党政権を維持するために利用されただけであったという憤りを共通してもつことになった。とくに長年にわたりパシッチの隠れ蓑にされ、クロアチア人の憎悪を一手に引き受ける羽目になったプリビーチェヴィッチにはこの思いが強かった<sup>20</sup>。

### 3 民主主義ブロックの形成の試みと挫折

農民・民主連合の議員はすべて旧オーストリア＝ハンガリー領諸地域の選出であった。これらの諸地域は別名「プレチャニン」の地域と呼ばれた。プレチャニンとは「川の向こう側に住む人びと」という意味であり、旧セルビア王国からみれば、旧オーストリア＝ハンガリー領はドナウ川、サヴァ川、ウナ川といった大きな川に隔てられた地域であったので、そう呼ばれた。したがって、農民・民主連合は「プレチャニンのフロント（連合戦線）」と呼ばれた。もともと、農民・民主連合は「プレチャニン」の諸地域のすべてを地盤としていたわけではなかった。彼らはクロアチア、スラヴォニア、ダルマチアでは強い影響力をもっていたが、スロヴェニア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、ヴォイヴォディナでは支持基盤は弱かった。そこで彼らはこの地域の有権者が共通して関心をもつ問題を取り上げて政府を攻撃し、プレチャニンの間での支持を広げようとした。彼らを選んだのは不公平税制の問題であった。

ユーゴスラヴィアでは地域別の税負担に大きな違いがあり、旧オーストリア＝ハンガリー領は旧セルビア王国領よりも多くの税金を支払っていた。このことは政府が公表する資料からも明らかであり、1919年から1926

年に徴収された直接税の総額の地域別内訳は、旧オーストリア＝ハンガリー領は79%であるのに対し、モンテネグロを含めた旧セルビア王国側（以下単に旧セルビア王国側とする）は21%にとどまっていた。旧オーストリア＝ハンガリー領側は旧セルビア王国側の4倍近い税金を支払っていたことになる。ところが、旧オーストリア＝ハンガリー領側と旧セルビア王国側の人口比は64%対36%であり、前者は後者の二倍近い規模であった。一人あたりの税額に換算すると、旧オーストリア＝ハンガリー領側では、ヴォイヴォディナおよびスレム1118ディナール、スロヴェニア1035ディナール、クロアチア・スラヴォニアおよびメジウムーリエ702ディナール、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ556ディナール、ダルマチア349ディナールであるのに対して、旧セルビア王国側では408ディナールであった。

以上は1927年11月4日にクロアチア農民党のイワン・クラヤーチが国民議会で指摘した数字を要約したものである<sup>21</sup>。クラヤーチは税負担の不均衡を是正するため、政府が提出を先延ばしにしていた「直接税に関する法律」案の上程を求める緊急動議を提出した。これに関連してステパン・ラディッチはクロアチアとプレチャニンの諸地域は略奪されていると発言して物議を醸した。しかし、与党側はこのような重要な法案を拙速に提出することはできないとして、クラヤーチの提案を却下した<sup>22</sup>。

旧オーストリア＝ハンガリー領の税負担が大きかったのは一つには経済的に先進的な地域が多かったからであった。だが問題はそれだけではなかった。国家統合以前の税制度を引きずって、旧オーストリア＝ハンガリー領の住民には所得税の義務があったが、セルビア王国側の住民にはその義務はないという税制上の違いが納税額の多少に反映されていた。二つの地域の税制の相違は、税体系の全国一律制を定めたこの国の憲法の規定に違反していた。農民・民主連合はこの点を鋭く批判した反政府キャンペーンを開始した。彼らは、この税負担の不公平は経済的・財政的な問題であるばかりか、心理的な問題を引き起こし、旧オーストリア＝ハンガリー領の住民は「二級市民」扱いを受けていると感じていると主張した。

12月16日には農民・民主連合を代表し、ユーライ・デメトレヴィッチが所得税の廃止を求める緊急動議を議会に提出した。しかし、与党側は予算が成立しなくなるという理由からこの提案を否決した<sup>23</sup>。もっとも、不公正を糾弾する農民・民主連合側の執拗な批判に抗しきれなくなり、政府側は次の法改正で所得税を一年間据え置いた後、1929年1月から廃止することを認めた<sup>24</sup>。これは農民・民主連合にとっては最初の成果といってよかった。

1928年に入り、政局は再び流動化した。そのきっかけを作ったのは民主党のダヴィドヴィッチであった。彼は民主主義ブロックの形成をあきらめていたわけではなかった。ダヴィドヴィッチは近く開催される党大会を利用して主導権を取り戻すつもりでいた。政権に陣取るマリコヴィッチ派の主導のもとで民主党がその基本政策を犠牲にし、急進党におもねる行動を続けてきたことには一般党员の間で不満が高まっていたからである。党大会の事前にかかれた党総務会では、1. 政権参加の継続、2. 党内機関の意思決定のあり方、3. 農民・民主連合との関係について、ダヴィドヴィッチ派の主導で問題提起がなされた<sup>25</sup>。この流れを受けて、1月15日と16日に開催された民主党の党大会では、民主党は政権参加して10ヶ月になるが改革は進展するどころか危機が深まり、法秩序の破壊が進行したという評価が下された。この結果、民主主義ブロックの形成をめざす党首のダヴィドヴィッチの方針に圧倒的な支持が与えられ、マリコヴィッチら閣僚グループの行動には厳しい批判が投げかけられた。党大会で採択された決議により、ダヴィドヴィッチには新しい議会会派の形成と協定の締結に向けて行動する権限が認められた<sup>26</sup>。党大会の直後、ダヴィドヴィッチはクロアチア人党幹部のミラン・グロルとともに、農民・民主連合のプリビーチェヴィッチ、農業者党のヨヴァノヴィッチと会談をおこなった。

しかし、この四者会談は具体的な行動を取り決めたわけではなかった。首相のヴキチェヴィッチは民主党の動きに警戒を強めていたが、ダヴィドヴィッチはまだ完全に党内を掌握しておらず、さしあたりそれほど脅威で

はないと見ていた。党大会の結論は政権離脱を求めるまでには至らなかった。民主党ではマリコヴィッチ派の巻き返しの可能性があると考えられた。むしろ、ヴキチェヴィッチが危険な存在とみなしたのは民主党よりも農民・民主連合であった。とくにかつては急進党政権のパートナーであったプリビーチヴィッチと独立民主党が政権批判の急先鋒となっていることは大きな脅威であった。

農民・民主連合に楔を打ち込むため、国王と首相のヴキチェヴィッチは新しい策略を仕掛けた。ラディッチの政権への取り込みである。これにはラディッチをプリビーチヴィッチから切り離し、併せて野党との連携をねらうダヴィドヴィッチの計画を挫く意図があった。ちょうど王妃のマリオラは1月19日に第二子を出産した。国王はヴキチェヴィッチの助言にしたがって、この子にトミスラヴという名を付けた。トミスラヴはクロアチア人が英雄視する中世クロアチア王国の王の名であり、国王がこの名を選んだのは明らかにクロアチア人の歓心を得るためであった。1月25日におこなわれた洗礼とそのあとの昼食会には多くの政治家に混じってラディッチの姿もあった。しかし、農民・民主連合のもう一人の代表のプリビーチヴィッチは招待されなかった。ラディッチはこのあと国王に謁見した。国王はこのとき大連立政権を前提にラディッチの政権参加を希望する旨を伝えた<sup>27</sup>。

1月26日、国王の意向を受けて、ヴキチェヴィッチはラディッチを呼んだ。彼はクロアチア農民党の政権参加を求め、3つの閣僚ポストを提示した。それは、農業改革担当相、商工相、社会政策相であった。これに対し、ラディッチは3つの条件を言い渡した。第一は5つの閣僚ポストであり、ラディッチの要求には財務相などヴキチェヴィッチが提示したポストよりも重要なポストが含まれていた。第二は予算案の修正であった。とくにラディッチは旧オーストリア＝ハンガリー領の住民の要求を満足させるための予算案の立案を強く求めた。第三は独立民主党の政権参加を認めることであった。しかし、ヴキチェヴィッチは独立民主党の政権参加をきっぱり

と拒否した。彼によれば、民主党から分かれた独立民主党は分派集団であり、大連立政権の単位となる政党とは認められないのがその理由であった。これで交渉は決裂となった。同日、ラディッチは農民・民主連合の議員を集め、ヴキチェヴィッチとの交渉の経過を報告した。このあと、ラディッチは農民・民主連合はあくまで一体で行動することを強調し、交渉の打ち切りを通告する書簡をヴキチェヴィッチに送った<sup>28</sup>。

一方、ダヴィドヴィッチは連立政権からの離脱を急いだ。彼は問題の決着を民主同盟の議員総会ではなく、民主党の内部でおこなおうと考えていた。前年の10月の経験から、民主同盟の議員総会の場合では、政権の座に執着するユーゴスラヴィア・ムスリム機構の議員がマリニコヴィッチ派に同調してダヴィドヴィッチの方針に強く抵抗することが予想されたからである。1月30日、ダヴィドヴィッチは民主党の議員総会を招集し、農民・民主連合および農業者党との合同会派の結成を提起した。しかし、この方針には閣僚の地位にあるヴォヤ・マリニコヴィッチとその同調者が強く反対した。前年の論争と同様にマリニコヴィッチは民主主義ブロックの形成に原則的には反対ではないとしながらも、内閣に代表を送る民主党が同時に野党と合同会派を結成することは不可能だと主張した。しかし、ダヴィドヴィッチの方針は政権からの離脱を前提としていた。結局、ダヴィドヴィッチとマリニコヴィッチの対立は投票によって決着をつけられることになった。2月1日、採決が実施された。開票の結果、投票権を持つ61人の議員のうち、36人がダヴィドヴィッチの方針に賛成した。これに対して、反対は21人、保留が1人、欠席が3人であった<sup>29</sup>。

この結果を受けて、マリニコヴィッチら民主党の5人の閣僚は2月2日、首相のヴキチェヴィッチに辞表を提出した。同日、民主党のダヴィドヴィッチ、農民・民主連合のラディッチおよびプリビーチェヴィッチ、農業者党のヨヴァノヴィッチは、新政権の受け皿を作るべく、実行委員会を発足させた<sup>30</sup>。しかし、ヴキチェヴィッチは税制に関する法律を議会で採択にかける必要があるという理由から、民主党閣僚の辞任のあとも辞表を

提出せず、首相の座にとどまった<sup>31</sup>。彼が国王に辞表を提出したのは2月8日であった。ところが、国王は同日、国民議会議長ニンコ・ペリッチの推薦に沿って、再びヴキチェヴィッチに組閣権を与え、すべての主要政党の参加を前提とした大連立政権の樹立を託した。ヴキチェヴィッチは直ちにダヴィドヴィッチとラディッチを呼び、政権参加を求めた。ヴキチェヴィッチはこのときも独立民主党の政権参加を認めなかったため、ラディッチは政権参加を断った。同様にダヴィドヴィッチも政権参加を断ったため、ヴキチェヴィッチはその日のうちに組閣権を国王に返上した<sup>32</sup>。

2月9日、国王は意外なことに、今度はラディッチに組閣権を与え、大連立政権の樹立を命じた。国王の指示をラディッチは単純に喜んだ。これまで組閣権者に指名されたのはすべてセルビア人であり、クロアチア人に組閣権が与えられたのはこれが初めてであったからである。ラディッチは、ダヴィドヴィッチ、ヨヴァノヴィッチ、および急進党パシッチ派のマルコ・トリフコヴィッチと協議し、政権協力の約束を取り付けた。ラディッチは前首相のヴキチェヴィッチとも会談した。ヴキチェヴィッチは、政権参加の条件として、首相ポストを急進党に譲ることを求めた。ラディッチは急進党の分裂を期待し、改めて急進党議員総会の総意を確認する書簡を送ったが、ヴキチェヴィッチの回答は同じであった。2月10日、ラディッチはこの結果を国王に報告し、組閣権を返上した。国王は、今度はダヴィドヴィッチを呼び、組閣を託したいと伝えた。しかし、ダヴィドヴィッチは急進党の態度を理由に組閣権を受けられないと述べ、要請を固辞した<sup>33</sup>。

2月11日、国王は急進党出身の国民議会議長ニンコ・ペリッチに組閣権を与え、大連立政権の形成を指示した。彼は直ちにラディッチを交渉に呼んだ。ラディッチは政権参加の条件として、農民・民主連合を一つの単位として受け入れること、財務相、法務相、農業相、農業改革担当相、森林・鉱山相の5つの閣僚ポストを譲ることを要求した。ペリッチは、この結果を急進党の議員総会に報告した。急進党はラディッチの要求を拒否するこ

とを決定した。ペリッチはこの決定をラディッチに伝え、条件の変更を求めたが、ラディッチはこれに応じなかった。それゆえ、ペリッチは2月12日、組閣権を国王に返上した。この結果を受けて2月13日、国王は再びヴキチェヴィッチに組閣権を与えた。ただし、今回は大連立の条件を付けず、単に政権の樹立を命じた。これは必ずしもすべての主要政党の参加を条件としないことを意味した<sup>34</sup>。

ヴキチェヴィッチは小規模政党のスロヴェニア人民党、ユーゴスラヴィア・ムスリム機構、ドイツ人党と交渉し、政権協力を取り付けた。議席数でいえば156を確保し、政権樹立のめどを立てた<sup>35</sup>。2月16日、ヴキチェヴィッチと会談した民主党代表のダヴィドヴィッチは、政権参加の用意があることを表明した。2月18日、民主党の議員総会もこの考えを支持した<sup>36</sup>。ダヴィドヴィッチはこの直前まで野党との民主主義ブロックの形成による政権奪取をめざしていたので、これはやや唐突な路線転換であった。ただし、民主党は内相のポストを要求し、これに反対する急進党と折り合いがつかないでいた。一方、国王は、プリビーチェヴィッチ（2月18日）とラディッチ（2月19日）を個別に宮廷に呼び、農民・民主連合の政権参加を促した。しかし、彼らはヴキチェヴィッチを首相とする政権の樹立には断固反対した。

2月20日、国王は再度ラディッチを宮廷に呼び、意見を聞いた。彼は農民・民主連合を含めすべて主要政党の参加を前提とした大連立政権の形成を重ねて主張した。これに対し、国王はここまでの経過から見て「すべての政党を束ねることができる人材がない」と述べたが、ラディッチはその場合には議会外の人物を首相候補者の中に入れるべきだと進言した。国王はこの進言を受け入れ、具体的人物の検討を宮廷幹部に命じた。この結果、何人かの退役将校の名前が噂に上った<sup>37</sup>。もっとも、このときラディッチは軍政を求めたわけではなかった。彼は、ここでいう議会外の候補者とは単に政党に所属しないということだけでなく、国民の意思に反し反議会主義的な方法で政治危機の解決を図ろうとするセルビアの大政党（すなわ

ち急進党と民主党)に対抗できる人物でなければならないことを国王に指摘していた<sup>38</sup>。したがって、「軍部出身者による政権の樹立は危険な実験ではないか」と記者から質問を受けたときも、ラディッチは「勝手にやって来て議会を無視するようならたしかに危ないが、議会が招いた人物である限り大丈夫だ」と自信を見せた<sup>39</sup>。

ラディッチの進言は波紋を呼んだ。軍人政権の形成には急進党の一部からも賛同する声上がる一方で、世論はこれを不安視した。農民・民主連合はかえって世論の支持を失い、非議会主義的な解決を求める反動主義的な勢力のように仕立てられた。このため、急進党と民主党は相対的に有利な地位に浮上した。この状況を見て国王は、急進党のヴキチェヴィッチに代えて、民主党のマリンコヴィッチに組閣を指示した。マリンコヴィッチは直ちに農民・民主連合と交渉をおこなったが、政策面で折り合いがつかなかった<sup>40</sup>。急進党もマリンコヴィッチの首相就任には反対した。そのため、マリンコヴィッチも組閣権を返上した。結局、国王は再度ヴキチェヴィッチに組閣権を与え、農民・民主連合を抜きにして組閣をおこなうことを認めた。予算の審議が近づいており、これ以上の政治空白は許されないことがその理由であった。2月23日、急進党、民主党、スロヴェニア人民党、ユーゴスラヴィア・ムスリム機構の4党で構成される第二次ヴキチェヴィッチ内閣が発足した。

三週間続いた政権協議は、あつけない幕切れを迎えた。ヴキチェヴィッチ政権の続投は「大山鳴動して鼠一匹」の感があった。ただし、大きな変化がひとつあった。それは、ラディッチの提言をきかっけに民主党と農民・民主連合との関係が悪化したことであった。民主党は急進党とともに、議会外の人物の首相指名を国王に促したラディッチの行動を「議会主義への攻撃」と非難した。彼らはヴキチェヴィッチ内閣の発足後、民主主義勢力の連合による政権の樹立が失敗したのはすべて農民・民主連合の責任だとした<sup>41</sup>。しかし、ラディッチの行動を導いたのは実は2月16日のダヴィドヴィッチの声明であった。すでに述べたように、このときダヴィド

ヴィッチは民主主義ブロックの形成をあきらめ、ヴキチェヴィッチ政権に参加の意思を明らかにした。ラディッチはダヴィドヴィッチの翻意に驚き、急進党と民主党との連立政権の復活の阻止しようとして、国王にあのような進言をおこなったのであった<sup>42</sup>。

ダヴィドヴィッチがなぜ方針を転換したのかは明らかではない。しかし、一つ明らかなことは、野党との共闘を求めたダヴィドヴィッチを支持した民主党の議員の多くは、民主主義ブロックの形成による政権奪取を本腰で考えていたわけではなかったことである<sup>43</sup>。ダヴィドヴィッチ派の議員はマリコヴィッチ派によって政権中枢から排除されたことを恨み、これに対抗するために野党共闘を求めた党首のダヴィドヴィッチを戦術的に支持した者が多かったようである。議員総会でのマリコヴィッチ派に対する勝利によってダヴィドヴィッチ派は党内の主導権を取り戻し、彼らの目的は達せられたとあってよかった。それゆえ、彼らは農民・民主連合との連携をこれ以上深めていく動機に乏しかった。それどころか、彼らは、政権交渉の過程で農民・民主連合が財務相や内相、外相のなどの重要なポストを要求したことに反発していた<sup>44</sup>。

さらに根本的な問題は出身地域の違いであった。民主党の議員の大半は急進党の議員と同様に旧セルビア王国の地域の選出であった<sup>45</sup>。ところが、民主主義ブロックの最大政党となる農民・民主連合は旧オーストリア＝ハンガリー領の出身者、つまりプレチャニンで構成される。したがって、民主主義ブロックの政権が実現した場合にはプレチャニンが主導権を握ることになり、旧セルビア王国の諸地域に不利な政策が遂行される恐れがあった。これらの事情から急進党との連立関係を求めるマリコヴィッチ派は民主党内で影響力を回復し、ダヴィドヴィッチ派も彼らと妥協し、急進党と協力する道を選択した<sup>46</sup>。こうして民主主義ブロック形成の試みは挫折し、ヴキチェヴィッチは諸政党との連立関係を強化して続投を確保した。

農民・民主連合は当然、民主党およびダヴィドヴィッチの裏切りを非難した。しかし、第三者の立場からみれば、ラディッチとプリビーチェ

ヴィッチの失敗は国王に調停役を期待したことにあった。多くの研究者が指摘するように、国王と宮廷こそはクロアチア農民党と独立民主党との結びつきを弱め、同時に農民・民主連合と民主党との関係を悪化させようと仕掛けてきた張本人であったからである<sup>47</sup>。国王は、政党間の対立関係を見透かし、もともと成立の可能性の乏しい大連立政権の樹立を様々な人物に指示し、これが実際に不可能になった時点でヴキチェヴィッチ政権を続投させる意向を示した。これに民主党が乗り遅れまいと政権参加を表明したため、農民・民主連合との関係の悪化を招いた。ラディッチとプリビーチェヴィッチの同盟関係を裂くことはできなかったが、国王に対し議会外の人物を首相に求めたことによってラディッチと農民・民主連合に対する世論の評価は低下した。したがって、国王は意図した目的をおおむね達成したのである。

#### 4 「農民・民主連合」の闘争と議会での殺人事件

民主主義ブロック形成の試みが挫折し、農民・民主連合は政権への道を閉ざされた。しかも、成立した第二次ヴキチェヴィッチ内閣にはクロアチア人閣僚が一人もいなかった。プレチャニン、より正確に言えば、クロアチアのクロアチア人とセルビア人は政権側から徹底した「排除の論理」に遭った。この結果、議会の勢力は二つの陣営に分かれて鋭く対立することになった。一方の極は与党陣営であり、その中軸は急進党、民主党の旧セルビア王国の政党連合であった。もう一方の極は野党陣営であり、その中心は「プレチャニンの戦線」である農民・民主連合であった。与党陣営は数の上では圧倒的に優勢であったが、野党陣営の農民・民主連合は一筋縄ではいかない手強い相手であった。彼らの中には議会での論戦となると無類の強さを発揮する議員が多かったからである。とくに独立民主党にはプリビーチェヴィッチを筆頭に舌鋒鋭い論客がそろっていた。しかも、かつて政権の中核にあった彼らは政権側の弱点を知り尽くしていた。クロアチ

ア農民党もステェパン・ラディッチを始め、辛辣な言い回しで相手の神経を逆撫でする弁論を得意とする議員が多かった。

1928年2月末に審議を再開した議会は冒頭から大いに荒れた。農民・民主連合が極めて挑発的な態度で政府を攻撃したためである。最初の衝突は2月29日に起こった。この日、クロアチア農民党のサヴァ・コサノヴィッチは、収容者に対する非人道的な処遇で悪名高いベオグラードの監獄の問題を取り上げ、その実態に触れて、内相のコロシェツの責任を鋭く追及した。「行き過ぎた行為や法律の違反はどこでもある」と答弁したコロシェツにラディッチが野次を飛ばし、両者は口論となった。この争いに別の議員が加わり、郵便・通信相のヴライコ・コーチッチは拳を構えてクロアチア農民党のイワン・ペルナルを挑発した。まもなく与党議員数名が野党席になだれ込み、野党側議員と乱闘になった。殴り合いの結果、双方ともに負傷者が出た。興奮した与党議員の中にはピストルを取り出す者もいたが、これは同僚の議員が制止した。このあと、議長のニンコ・ペリッチは不穏当な発言をおこなったラディッチを3日間の出席停止処分とすることを提案し、それは与党側の賛成により可決された<sup>48</sup>。この処分に反発した農民・民主連合はラディッチに同調して3日間審議を欠席した。さらに彼らは議会のボイコットをほのめかし、ラディッチは国王に与党側の横暴を直訴した<sup>49</sup>。

3月7日、農民・民主連合はベオグラードの監獄の問題を再度取り上げた。監獄の実態を政府が調査した際に監獄の管理部が証言者に圧力をかけて収容者の取り扱いに関する事実を隠蔽したことが発覚したためである。加えて農民・民主連合はこの問題を議会で取り上げないように警察から圧力があつたと述べた。彼らは内相のコロシェツに調査の結果を明らかにするように求めた。今回もまた与野党の議員は激しい口論となり、事態は乱闘に発展した<sup>50</sup>。3月13日にはラディッチが社会政策相のチェド・ラドヴィッチを閣僚の資格がないと罵ったことがきっかけで、急進党議員と農民・民主連合議員の間で再び乱闘騒ぎが起こった。ラディッチはラド

ヴィッチを「泥棒」と呼んだため、再び3日間の出席停止処分となった<sup>51</sup>。さらに農民・民主連合は政府のいやがる不公平税制の問題を執拗に取り上げた。2月7日の法改正により旧オーストリア＝ハンガリー領の住民だけに課せられていた所得税はあと1年間延長されることが決まっていたが、農民・民主連合は徴税の平等化を理由にその即刻廃止を主張し、3月16日にはこれを再度議会に提案した<sup>52</sup>。政府側はこの仕返しとして、「銃器の所持に関する法律」案の審議の中で、第一次世界大戦中に祖国を解放するための戦いに参加しなかった者から所持する銃器を没収すると発議した。これは主として旧セルビア王国の住民にのみ銃器の合法的所有を認め、敵国であった旧オーストリア＝ハンガリー領の住民には銃器の所有の権利を認めないことを意味していた<sup>53</sup>。

農民・民主連合は論戦には強かったが、数の上での劣勢は克服できなかった。与党側は議論で負けても最後は多数決で相手を押し切ることができた。それゆえ、彼らは、審議のボイコットや議事進行の妨害といった戦術に重点を移すようになった。たとえば、彼らはもっとも重要な議案である予算案の審議を欠席した。その上で予算案は彼らの欠席のもとで採択されたため、彼らの代表する諸地域の住民は納税の義務を負わないと強弁した。議事進行の妨害については、彼らは閣僚に対する問責決議案の提出をもっとも効果的な方法と考えた。ラディッチは過去の閣僚を含めて20人分の問責決議案を用意していると豪語し、首相のヴキチェヴィッチに対する問責決議案の提出を皮切りに次々とこれを提出した。議会の運営規程は議員に議案の提出の権利を認めているので、国民議会はこれを逐一審議にかけなければならなかった。閣僚に対する問責決議案の提出に伴って農民・民主連合の議員は政府を辛辣な言葉で批判した。これは与党側議員の激しい反発を招き、しばしば暴力を伴う衝突を引き起こした<sup>54</sup>。

与野党間でもっとも頻繁に問題になったのは議事録をどう残すかといった手続き的な問題である。そのため、議会の審議は、提案の内容よりも発言の記録や取り消しといった問題に多くの時間が費やされた<sup>55</sup>。与党側は

野党議員の攻撃に対する対抗策として懲戒処分を多用した。相手に対する侮辱的な発言を理由に農民・民主連合の議員の多くが処分を受けたが、もっとも頻繁に処分の対象になったのはステェパン・ラディッチである。彼は5月9日には三度目の出席停止処分を受け、10日間も議会から閉めだされた。これは、首相のヴキチェヴィッチならびに他の閣僚に向かって、「悪党」、「無慈悲者」、「犯罪者」、「無価値な男」、「変節漢」と罵詈雑言を浴びせたからであった<sup>56</sup>。ラディッチは6月9日に議長から即時退場を言い渡され、警備員によって議場から無理矢理に退去させられたこともあった。

議会内で劣勢であったため、農民・民主連合は議会外での活動も重視した。1928年の4月と5月、ラディッチは旧オーストリア＝ハンガリー領の主要な都市を選び、毎週日曜日に農民・民主連合の演説会を開催した。これにはたいていプリビーチェヴィッチが同行した。彼らはそれぞれ演壇に立ち、そろってベグラード政府の政策を厳しく批判した。ここで注目すべきことは、政府との共闘を進める中で、当初は根本的な食い違いがあった国家制度に関するラディッチとプリビーチェヴィッチの考えが接近していったことである。

1927年11月に農民・民主連合を結成したとき、現行のヴィードヴダン憲法の熱烈な擁護者であり、起草者の一人でもあったプリビーチェヴィッチはこの憲法を擁護する立場を依然堅持していた。ラディッチも同様の立場に立ち、憲法が保障する市民的な権利を根拠に民主主義的な改革を要求する戦術を採用した。国家制度に関していうとそれは地方自治権の確立であった。これは独立民主党の元来の主張でもあった。それゆえ、クロアチア農民党と独立民主党は同じ立場に立つことができた。しかし、そこから先では両党の考え方には大きな隔たりがあった。ラディッチは地方議会選挙を通してクロアチアの各行政区の支配権を握り、その連携を緊密にしてベオグラードの中央政府に対抗していく戦略をもっていた。もともと連邦制への変更を主張していたラディッチは1925年の政策転換の際にこの立場

を放棄していたため、今度はより実質的な形でクロアチアの自治権を確立しようと考えたのである。しかし、この構想はプリビーチェヴィッチの持論である中央集権主義的国家の形成とはかけ離れたものであった。

しかし、農民・民主連合の結成後、数ヶ月してプリビーチェヴィッチの見方に変化がみられるようになった。1928年の2月、農民・民主連合が将来の連立政権の基本政策としてまとめた19項の政策にはすでに「行政区の範囲の拡大と自治権の拡大」が含まれていた。その上で、プリビーチェヴィッチは党の機関誌で憲法修正の可能性を初めて口にした。これらの政策は現行の憲法を前提とし法律の制定によって実施することを見込んでいたが、プリビーチェヴィッチは将来の課題と断りつつも、必要ならば憲法の修正もおこなわなければならないと述べた。このあと、3月24日にプリビーチェヴィッチは国民議会でも憲法修正の可能性を言及した。ラディッチは「行政区の範囲の拡大」を具体化し、5月27日のドブロヴニクの演説会で、クロアチア、スラヴォニア、ダルマチアを一つの行政区に統合し、全体でも現行の行政区は4つないし5つの行政区に統合すべきだと発言した<sup>57</sup>。6月10日のオシエクの演説会では、プリビーチェヴィッチはさらに踏み込んだ発言をした。「現行の憲法によっては、自由、同権、平等は実現できないので、改正をおこなう必要がある」と述べたのである。翌日ラディッチはザグレブの会議で、国家を4つの行政区に再編する案として、北セルビア、南セルビア、スロヴェニア、アドリア・ドナウ河畔の4行政区に再編する案を披露した<sup>58</sup>。

ところで、農民・民主連合は外交問題をも政府攻撃の材料に使った。それはイタリアとの間で結ばれたネットゥーノ条約であった。この条約自体は1925年7月に調印され、議会での批准手続きを残すだけになっていたが、政府はその遂行を先送りになっていた。これを不満としたイタリアは条約の早期の批准を求め、同盟国のフランスとイギリスもこれを政府に懲罰していた。それゆえ、政府は条約の批准をこれ以上先延ばしできないと考えた。しかし、この条約はイタリアに特権を付与する条項があった。たと

えば、条約はイタリア人に国境から50キロ以内の移住を認め、ダルマチアの土地改革をイタリア人地主に有利におこなうことを規定していた。イタリアはダルマチア沿岸での漁業権も認められていた<sup>59</sup>。ダルマチアのクロアチア人とセルビア人はこの条約に反対であり、5月26日にはザダルのイタリア領事館が襲撃されるという事件が起こった。農民・民主連合は国民の反イタリア感情を政府攻撃に利用しようとした。5月29日、国民議会でプリビーチュヴィッチは農民・民主連合を代表し、あらゆる措置を尽くして条約批准を阻止することを政府に宣言した。5月30日、31日には条約の批准に反対する大規模なデモがベオグラードで連日発生した。農民・民主連合の議員はこのデモには参加しなかったが、農業者党とともに国民議会でこれに連帯する態度を示した<sup>60</sup>。

このため、政府と農民・民主連合との緊張は極度に高まった。6月14日、政府系のベオグラードの日刊紙『イエディンストヴォ（統一）』には国家を破壊するプリビーチュヴィッチとラディッチはいつか殺されるだろうと述べる記事が掲載された。これに怒ったクロアチア農民党のイワン・ペルナルは、同日に開かれた財務委員会でヴキチュヴィッチとその息子こそが殺されるべきだと罵った。このあと議場ではクロアチア農民党議員と急進党議員との間で罵声の応酬が起こった。6月16日、外相のマリンコヴィッチはついに条約を議会に上程し、議長のパリッチは議員に審議を求めた<sup>61</sup>。事態を憂慮した農業者党のヨヴァノヴィッチは農民・民主連合と政府との争いを調停しようとした。彼は6月15日、18日に双方の代表を呼んで話し合いをおこなった。しかし、農民・民主連合が和解の条件として要求した法案（農業金融、ダルマチアの農地改革、農民債務の清算）の緊急上程を政府側が拒否したため、話し合いは物別れに終わった<sup>62</sup>。

国民議会の審議では与野党の議員の間で罵声の応酬が連日続いた。しかし、議論に飽いた急進党議員の中には審議に参加せず、廊下をぶらぶら歩いたり、喫茶室で暇つぶしをしたりする者も多かった。これに憤慨したステパン・ラディッチは議場で急進党議員をこう皮肉った。「(外でたむろ

して) 仕事に出てこない議員は議員ではない。それは議員ではなく牛である」。ラディッチの発言に急進党議員のトモ・ポポヴィッチが逆上し、こう叫んだ。「ここで首が落ちて血が流れるだろうが、それはセルビア人の責任ではない」<sup>63</sup>。

6月19日、急進党議員のプーニシャ・ラチッチは23名の与党議員の署名を添えて国民議会議長に次のような措置を求める提案書を提出した。1. ステパン・ラディッチを医師に診察させ、正常な精神状態であるかどうかを確かめること。これまでの彼の行動は、正常な精神状態であるかどうかを疑わせるものであるから。2. 医師がラディッチの精神異常を認めなかった場合には、国民議会の運営規程が定める最高の懲罰をラディッチに科すことを求める。提案書は最後にこう述べた。「我々は、望ましくない事態の発生を避けるためこの提案を緊急におこなう。このあとのような結果が起ころうと、その事態はステパン・ラディッチの行動の結果として必然的に発生したものである」。しかし、議長のパリッチはこの提案書を受理しなかった。議会の運営規程にはラディッチを病院の診断に付すような条項がないことがその理由であった<sup>64</sup>。

6月20日、農民・民主連合の議員は開会が告げられるとすぐに、前日トモ・ポポヴィッチやプーニシャ・ラチッチら3名の急進党議員が議会でラディッチの殺害を予告する発言をしたことに抗議をおこなった。これに対し、トモ・ポポヴィッチは再び演壇に立ち、前日のラディッチの発言に抗議をおこなった。彼は、農民・民主連合議員の野次に対して、ラディッチの殺害を再び口にした。「君たちの指導者であり、クロアチア人の恥さらしであるステパン・ラディッチが今後も侮辱的発言を続けるならば、私は誓って言う。奴の首は落ちる」。農民・民主連合の議員は議長席に駆け寄り、ポポヴィッチの発言に激しく抗議した。議長はポポヴィッチを戒告処分とした<sup>65</sup>。

このあと発言を求めたのがプーニシャ・ラチッチである。彼はこう述べた。「私は成人し、世の中で人と交わるようになって以来、セルビア人の利

益、そして祖国の利益を守ることを片時も忘れずに心がけてきた。あなた方にはっきりと言わせてもらおう。今ほど銃や大砲を撃たなければセルビアの利益が危機にさらされているときはない。セルビア人として、また国会議員として、自民族と祖国に危機が迫っているのを目にするとき、私ははっきりといたい。セルビアの利益を護るために必要なもう一つの武器を使用させてもらおう」。ラチッチは野党議員の野次や足踏みにたびたび遮られながらも発言を続けた。しかし、イワン・ペルナルの飛ばした「ペグ（＝ムスリム人の地主）を略奪したことがあるだろう」という野次にラチッチは切れた。彼は自分の席を立て、対面するクロアチア人議員の席に向かった。彼は議長に向かってこう叫んだ。「議長、ペルナルに罰を与えてもらいたい」。(野党席から反対の騒音)。「おれとペルナルの邪魔をする奴は殺してやる」。再び大きな騒音が立てられ、議長は審議の中断を宣告した。しかし、ラチッチは衣服のポケットから拳銃を取り出しこう述べた。「あんたがおれを守ってくれないなら、おれが奴を成敗してやる」<sup>66</sup>。

ラチッチは近くにいた閣僚のヴィチッチおよび同僚議員の制止を振り切り、ペルナルに向けて銃弾を発射した。胸部を撃たれたペルナルはぼたりと床に倒れた。ラチッチは、今度はステェパン・ラディッチを狙った。クロアチア農民党議員のイワン・グランジャとジューロ・バサリチェックがラディッチの身を守ろうとし飛び出した。ラチッチはさっと振り向いて彼らに銃口を向け、引き金を引いた。銃弾はバサリチェックの横腹に命中した。続いてラチッチは、身を体してラディッチを守ろうとしたグランジャの腕を撃った。グランジャがうずくまると、ステェパン・ラディッチは座席にむき出しになった。ラチッチは落ち着いて銃口を向け、引き金を引いた。銃弾はラディッチの腹部に命中した。これを見たパヴレ・ラディッチは叔父のラディッチに駆け寄った。ラチッチはパヴレ・ラディッチを見据えてこういった。「お前を探していた」。5発目の銃弾はパヴレ・ラディッチの胸部に命中した<sup>67</sup>。

病院から医師が駆けつけたがジューロ・バサリチェックは即死であった。

パヴレ・ラディッチは病院に運び込まれたが、すぐに息を引き取った。ステパン・ラディッチ、イワン・ペルナル、イワン・グランジャは重傷を負った。ステパン・ラディッチは病院に運び込まれ、すぐに手術を受けた。3人の医師が手術に当たり、念のためザグレブからも著名な外科医が呼ばれた。医師団の発表によれば、容態は重篤ではなく、内臓も傷ついてはいないということであった。しかし、彼の年齢から判断して、このような重傷に体が耐えられるかどうか危ぶまれるということであった<sup>68</sup>。

翌日、プーニシャ・ラチッチは同僚議員に付き添われて、内相コロシエツツのもとに出頭した。彼は法務省の建物に移送され、そこでズボンの後ろポケットから拳銃を取り出して、手渡した。彼はこう述べた。「この拳銃は（バルカン戦争の起こった）1913年から所持している。これでブルガリア人の将校1人と兵士2人を殺し、自分の身を守った。自分にとってはこの拳銃は幸運と呼ぶものだと考えている」。事件のあとどこに隠れていたのかという問いには答えなかったが、家族や友人、支持者に手紙を書くために身を潜めていたとのみ述べた<sup>69</sup>。

新聞は号外で事件を全国に報じた。クロアチアの町や村々では直ちに抗議の行動が起こった。ザグレブでは事件が起こった6月20日のうちに激しいデモが発生し、それは翌日も続いた。デモ隊は治安部隊と衝突し、3人の若者が死亡し、60人以上の負傷者、120人の逮捕者を出した。これはさらに人びとの怒りを掻き立てた。治安当局は政党の集会を禁止し、厳重な警戒態勢に入った。バサリチェックとパヴレ・ラディッチの遺体はベオグラードからザグレブに運ばれ、6月23日、葬儀がおこなわれた。葬儀には3千人が参列し、10万人の市民が彼らの棺を葬儀場まで見送った。

## 5 事件後の「農民・民主連合」とベオグラード政府

首相のヴキチェヴィッチは、議会の中で起こった不幸な事件に遺憾の意を伝える書簡をクロアチア農民党の議員クラブに送った。しかし、クロア

チア農民党はこれを突き返した。6月21日、農民・民主連合の議員総会は議会のボイコットを決め、ベオグラードを去ることにした。彼らは声明を発表し、その中で、事件を計画的で組織的な犯行とみなし、事件に対する完全な補償と原状回復が与えられ、農民・民主連合の議員が対等・同権の扱いを受けることが完全に保証されない限り、国民議会の審議には戻らないことを宣言した。彼らは併せて政府とは関係をもたないこと、および政府からの見舞いの申し出はいっさい拒否することを通告した。しかし、彼らは国民に対しては秩序の維持を呼びかけ、指導部を信頼して最終的な決定が発表されるのを待つように訴えた<sup>70</sup>。

6月22日、急遽国王に呼ばれたプリビーチェヴィッチは、状況の打開策として、ヴキチェヴィッチを更迭してラディッチに組閣権を与え、総選挙を告示することを提案した。しかし、国王はこれに難色を示した。ヴキチェヴィッチの辞任は政府が事件の責任を認めたとの印象を世論に与えるし、クロアチアの情勢を考えると正常な選挙ができるか疑問だというのがその理由であった<sup>71</sup>。しかし、プリビーチェヴィッチは6月26日に声明を発表し、最低限の条件として国民議会の即時解散と自由選挙の告示を重ねて主張した。同様に、ザグレブの農民・民主連合の指導部は、どのような条件を提示されても現在の議会には参加できないという声明を発表した。ところが、ベオグラード政権の反応は冷やかであった。急進党と民主党は議会の解散に応じる意思はまったくなく、いかにして政権を維持するかということだけを考えていた。

それでも、事件の発生から二週間が経過した7月4日になって、ヴェラ・ヴキチェヴィッチは辞表を提出した。国王が内閣の刷新を求め、与党四党もこれに同意したためである。国王は直ちに急進党の副議長のアツツァ・スタノエヴィッチに組閣権を与え、農民・民主連合を加えた大連立政権の樹立を託した。同日夜、スタノエヴィッチは病院を訪ね、医師に面会してステパン・ラディッチとの会談を申し込んだ。しかし、ラディッチはこれを拒否した。彼は医師を通してこう伝えた。「スタノエヴィッチは

ヴキチェヴィッチを支持し、与党の支柱であるとともに、殺人者を出した急進党の副議長である。だからスタノエヴィッチとは今も、またこれからもいっさい話しをすることは出来ない」。さらにラディッチは、誰が来ようとも与党のメンバーとは金輪際会うつもりはないと付け加えた。スタノエヴィッチは翌日ラディッチの回答を国王に報告し、このような状況では期待に応えられないとして、組閣権を返上した<sup>72</sup>。

国王は同日（7月5日）プリビーチェヴィッチを宮廷に呼び、ラディッチに組閣権を与え、大連立政権の樹立を託したいと述べた。プリビーチェヴィッチはこれを病床のラディッチに伝えた。しかし、彼はこの申し出を断った。ラディッチはプリビーチェヴィッチを通して国王にこう伝えた。大連立政権は形成できないし、今の時期にはふさわしくない。現在の議会では仕事が出来ないので、国民議会の解散を認め自由な選挙の実行を野党側に委任してほしい。将来に召集される議会ではこれまでの経験と国民・国家の必要性に沿って憲法改正の問題を検討したい。ラディッチは、国民議会の解散と自由選挙の実行は政党に属さない中立の人物を首相に指名し、その内閣の管理に委ねてもよいと述べた<sup>73</sup>。

これを受けて、国王は7月13日、前内閣で国防相を務めていたハジッチ将軍に組閣権を与え、ラディッチが求めた「政党から中立の政府」の形成を命じた。ハジッチは国王の指示を忠実に実行しようとし、政党に属さない3名のクロアチア人に入閣を打診し、「政党から中立の政府」の実現をめざした。しかし、急進党や民主党など前政権の与党はハジッチの首相指名に難色を示し、これを受け入れるとしても国民議会の継続は譲れない条件だと主張した。ところが、プリビーチェヴィッチは農民・民主連合を代表し、5名のクロアチア人議員の殺傷の舞台となった議会の即時解散を求める声明を出した。入閣の要請を受けた3名のクロアチア人も新しい政府は現在の議会とは仕事をしてはならないと主張した。この結果、ハジッチの組閣作業は行き詰まり、7月23日、彼は組閣権を国王に返上した<sup>74</sup>。

翌日（7月24日）国王は、スロヴェニア人民党のアントン・コロシェツ

ツに組閣権を与えた。スロヴェニア人が組閣権を得たのはこれが初めてであった。国王は、セルビア人以外の民族から首相を起用することでクロアチア人の怒りを少しでも鎮めようとしたが、コロシェツの指名は逆効果をもたらした。なぜなら、コロシェツは前内閣で内相を務め、農民・民主連合が敵視してきたヴキチェヴィッチ政権の最大の協力者の一人であったからである。コロシェツは国王の要望に添って、農民・民主連合の代表者としてプリビーチェヴィッチに協議を呼びかけ、会談をセットした。ところが、プリビーチェヴィッチはこの会談を書面で断った。彼は、コロシェツによる組閣は現在の議会の維持を前提としていること述べ、話し合いには応じられないとした。これはその通りであった。しかしそれがゆえに、コロシェツの首相指名は急進党と民主党によって受け入れられ、彼は組閣に成功した。

7月27日、国王は新内閣の閣僚を認証した。これによって建国以来の初の非セルビア人を首相とする内閣が成立した。政党別の閣僚配分は、急進党8、民主党5、スロヴェニア人民党3、ユーゴスラヴィア・ムスリム機構1であった。急進党と民主党は閣僚ポストをめぐる争いを起こしたが、何とか合意に達した。スロヴェニア人民党は漁夫の利を得て過去最多のポストを獲得した。コロシェツはクロアチア人を排除したと攻撃されないように、クロアチア人から二人の閣僚を起用した。一人は民主党のダヴィドヴィッチ派のグルガ・アンジェリノヴィッチであり、もう一人はクロアチア大衆党の唯一の議員であるステェパン・バリッチであった<sup>75</sup>。

しかし、事態は本質的には何も変わっていなかった。新内閣は首相と閣僚の顔ぶれに若干の入れ替えがあったが、与党四党による政権の枠組みは不変であった。新首相は国民議会の解散を求めず、現在の議員構成のままで、政権運営を続けた。7月4日のヴキチェヴィッチの辞表提出に始まる政局の流動化が国王との組閣権のやりとりを経て政権の枠組みの維持に終わった経過は、この年の2月に起こった政変がたどった経過とよく似ていた。違いは、首相のヴキチェヴィッチが今回は本当に退陣したことだけで

あった。5人の議員の死傷という大きな犠牲を出したにもかかわらず、農民・民主連合の要求は何一つ満たされなかった。それだけにこのような決着の仕方は農民・民主連合の不信感を増長させた。

コロシェツ政府は8月1日に臨時議会を召集したが、農民・民主連合の議員はベオグラードには来なかった。そのため、実質的な野党は小政党の農業者党だけであった。議会の会期中、与党四党は以前に農民・民主連合が提案した閣僚の間責決議案を粛々と否決し、最終日の8月13日には懸案のネットウーノ条約の批准案を可決させた。農業者党はクロアチア人の政治代表が不在であることを理由に採決の実行に反対したが、無駄だった。しかし、コロシェツ政府は前政権から受け継いだその他の重要法案（各地域の法律の平準化、農民の債務の清算、ダルマチアの農地改革、オープチナの自治など）については採決を見送った。農業者党は継続審議を主張したが、与党四党はこれらを審議未了のまま廃案にし、10月の議会で改めて法案を提出することにした<sup>76</sup>。

国民議会をボイコットした農民・民主連合は8月1日、同日ベオグラードで開かれた議会に対抗する形でザグレブの国会議事堂に集結し、議員総会を開いた。冒頭報告をおこなった共同議長のプリビーチェヴィッチは6月20日の事件以後の政局を総括し、ベオグラードの支配層にはこの国を旧セルビア王国の後継物としか考えないイデオロギーが染み込んでいることが明確になったと述べた<sup>77</sup>。続いてクロアチア農民党副議長のヨシブ・ブレダヴェツは、1927年11月の農民・民主連合結成以後に起こった出来事を次のように要約した。

1. 農民・民主連合は、クロアチアを始めとする旧オーストリア＝ハンガリー領諸地域とセルビアとの対等・同権の確立を使命とし、この目的を議会活動によって合法的に実現するために結成された。2. しかし、セルビアの優越的地位を維持しようとする側は、農民・民主連合の合法的闘争の成就を妨げるために、1928年6月20日に組織的な犯罪に手を染めた。3. その結果、クロアチア人議員は議会の場で射殺された。農民・民主連合は

ベオグラードの議会を去り、セルビアの優越的支配を代表するすべての政党との関係を断った。4. 農民・民主連合代表のラディッチは、事件の真相究明と厳正な審理を保障するとともに、国民にその将来の運命について自由な意思表示の機会を与えるため、政党の影響下でない中立的な政府の形成と自由選挙の実施を国王に提案した。5. ところが、この提案に反し、セルビアの優越的支配を代弁する政府が再び形成された。これには信仰を政治目的に利用しようとするプレチャニンの二つの政党が手を貸した。この政府は、残虐非道な殺人事件の舞台となった議会をそのままの議員構成で召集し、予算審議や立法作業を続けさせようとしている<sup>78</sup>。

その上でブレダヴェッツは次の決議案を提示し、出席の議員は満場一致でこれを採択した。

1. 8月1日に召集された国民議会は農民・民主連合の不参加によって正規のメンバーを欠いた不正常な議会であって、全国に適用される決定を下す資格を有しない。したがって、この議会がおこなうあらゆる決定、中でも財政的負担に関する決定は、プレチャニンの諸地域、とくにクロアチアにとっては無効であり、従う義務を負わないとみなす。2. セルビア王国との国家合同に参加したクロアチア、モンテネグロおよび民族評議会に代表を送った諸地域は、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の合同国家の形成のために、その歴史的国家的な独自性と民族的政治的な独自性を放棄したのであって、セルビアという一地域の利益に奉仕するためにこれをおこなったのではない。ところが、1918年12月1日の国家合同の宣言と1921年6月28日制定の憲法は、旧セルビア王国の優越的支配をその他の諸地域に強要するための道具として使われた。しかし、議会で発生したあの殺人事件によって、国民の意識の上では現存の国家制度は完全に無効になった。それゆえ、我々は、すべての諸地域の完全な対等・同権を保障する新しい国家制度を求めて断固たる闘いを始めることを宣言する。3. 農民・民主連合は、プレチャニンの居住地域を根拠とするすべての政党と政治集団に対して、この平等と同権を求める闘いに参加するように呼びか

ける。セルビアの農民大衆、およびこの政治的覇権主義を是認しないすべてのセルビアの住民に対しては、国家共同体を危機から救いうる唯一の道であるこの偉大なる原則が勝利を収めるように、支援を表明されることを期待する<sup>79</sup>。

8月1日の決議は、農民・民主連合の主張がラジカル化したことを示した。それは第一に農民・民主連合が初めて国家制度の変更の要求を出した点で画期的な意味をもっていた。たしかにこの決議は「すべての諸地域の完全な対等・同権を保障する新しい国家制度を求める」と述べているだけで、その具体的な内容まで明らかにしていない。しかし、これまで現行憲法を前提として闘争を進めてきた農民・民主連合はこの立場を放棄し、国家制度の変更を第一にその改正を求める立場に転換したのである。これは結党以来ヴィードヴダン憲法の厳格な実行を主張してきた独立民主党が国家制度に関する綱領的立場を修正し、クロアチア農民党の立場に接近したことを意味した。もちろん、両党が描く将来の国家像にはなお大きな懸隔があり、それゆえ決議は漠然とした枠組みしか示せなかったが、農民・民主連合の運動が新しい段階に入ったことは明らかであった。

8月1日の決議で示されたもう一つのラジカルな主張は、セルビアの諸政党とは接触も交渉もいっさい拒絶するという立場である。彼らが協力を呼びかけた政党は旧オーストリア＝ハンガリー領の諸政党であり、セルビアでは農民大衆と諸個人にのみ支援を呼びかけただけで、いかなる政党も接触の対象外としていた。農民・民主連合は、セルビアの政党と話し合っても彼らが望む協定の成立は不可能だと確信するに至ったと強調した。農民・民主連合は7月末まではなお議会主義的な解決に期待に取り組んでいたが、与党四党の政権維持と議会の継続という事態を受けて、8月1日以降は政党間協議による解決にまったく期待をしなくなった。しかし、これは、ベオグラードの支配層との和解の可能性が客観的には大きく狭まったことを意味した。

なお農民・民主連合の呼びかけに応じて、8月2日、クロアチア農民党

と競合する勢力であったクロアチア・ブロックの二人の議員が農民・民主連合の議員クラブに加入した。一人はアンテ・トルムビッチであり、もう一人はアンテ・パヴェリッチであった。後者はクロアチア権利党の指導者であり、後にファシスト団体ウスタシを結成した人物である。これによって、農民・民主連合はクロアチア人のほぼ全政治勢力を結集させた<sup>80</sup>。

ところで、ステパン・ラディッチは7月8日に医師団に付き添われてベオグラードからザグレブに汽車で戻った。途中、列車が駅に停車するごとに待ち受けた民衆が車両を取り囲んだ。ザグレブの中央駅ではさらに多くの市民が待っていた。ラディッチは車窓から人びとに挨拶したが、一般民衆との対話はこれが最後の機会となった。その後もっぱら自宅療養を続けたラディッチは、8月1日に農民・民主連合が採択した決議に署名したのが最後の仕事となった。彼は8月7日、危篤状態になった。ラディッチの治療のためにウィーンとミュンヘンからも著名な医師が呼ばれていたが、体力の衰えには対処のしようがなかった。ラディッチは8月8日夜に昏睡状態に陥り、その日のうちに息を引き取った。享年57歳であった。最期を見届けたヴラツコ・マチェックはこう叫んだ。「無冠のクロアチア王が死んだ」。検死をおこなった医師団は、心筋梗塞と糖尿病の合併症による心臓の衰弱を直接の死因とする所見を発表した<sup>81</sup>。ラディッチの葬儀は8月12日におこなわれたが、これにはパヴレ・ラディッチとバサリチェックの葬儀を上回る数の人びとが参列した。クロアチアの各地から参列者を運ぶため、9本の臨時列車がザグレブに向かったほどであった<sup>82</sup>。翌日、クロアチア農民党は新しい議長に副議長だったマチェックの昇格を決め、彼は同時に農民・民主連合の共同議長に就任した。

国民議会は8月13日に閉会となった。夏休みに入り、ベオグラード政府はクロアチア人の興奮が静まるのを待っていた。しかし、クロアチアの民族運動のシンボルであったラディッチの死によって、クロアチア人の怒りはいっそう高まった。議会の最終日に政府がネットウーノ条約の批准を強行したことはクロアチア人の神経を逆撫でした。

8月1日に農民・民主連合が採択した決議はベオグラードの支配層には否定的に受け止められた。セルビアの主要政党の中には、野党の農業者党を含めて、国家制度の変更に賛成する者はいなかった。たとえば、民主党のダヴィドヴィッチは、友人に宛てた手紙の中で6月20日の事件の余韻が生々しい状況下では国家制度の変更はできないし、まして選挙の実行は不可能だと述べていた。また別の手紙では、個人的な犯罪をセルビア人全体に責任を負わせ、本来はクロアチア人と同じ民族を構成するセルビア人を別の文化と道徳規準をもつかのごとく主張する彼らの決議は、決して改革の基礎にはならないとも述べていた。しかし、民主党は1925年の党大会で「広範な地方自治の確立」を求め、これを達成するためには憲法の修正も提起するという路線を打ち出していた。それゆえ、民主党の指導部は農民・民主連合の決議が国家制度をどのように変更するのかを明らかにしていない点を疑問とし、この点を明確に示すように求めることで、対話の糸口を探ろうとする姿勢も示した<sup>83</sup>。

しかし、セルビアの与党の中には感情的な反発もあった。それは農民・民主連合の決議が、政権与党をセルビアによる優越支配の護持者と決めつけ、彼らとはいっさいの関係を持ちたくないとかからさまに述べていたからである。彼らの中には1918年12月の統一国家の樹立にまで難癖を付けるクロアチア人の態度に嫌気を感じる者もあり、非公式にはあるが次のような考えを述べる者もいた。「このようなプレチャニンとは別れた方がよい。クロアチア人が自分たちをそんなに憎んでいるなら、彼らに出て行ってもらった方が我々には好都合だ」。これはいわゆる「クロアチアの切り離し」論である。つまり、クロアチア人と政府に不満のあるセルビア人のプレチャニンが居住する地域を国家から分離し、彼らの好きなように任せるという考え方である。ベオグラードではその先例として1905年にルウェーがスウェーデンから平和的に分離したことが指摘された<sup>84</sup>。

しかし、「クロアチアの切り離し」は、クロアチア人にとっても、クロアチアのセルビア人にとっても危険な議論であった。国境線をどのように引

くかという問題が含まれていたからである。クロアチア人が主張する歴史的に固有な地域とセルビア人が主張する歴史的に固有な地域は重なる部分があった。それゆえ、セルビアの支配層が欲するように国土が切り取られると、「大セルビア」が実現する一方で、クロアチア人には最小の地域しか与えられない恐れが大いにあった。その結果、クロアチア人も、クロアチアのセルビア人も二つの国家に分断されてしまう恐れがあった。それにユーゴスラヴィアから切り離されたクロアチアは隣国のハンガリーやイタリアの脅威にさらされ、最悪の場合には両国による分割併合の恐れがあった。

それゆえ、農民・民主連合の指導部は、直ちにこの議論に反論した。スヴェトザール・プリビーチェヴィッチは9月6日、ベオグラードの報道関係者との取材に応じて発言し、セルビアの諸政党だけで国家の切断をおこなうことができるのかと疑問を投げかけた。彼によれば、この国家は国際的な条約によって形成されたものであり、国際的な意味をもっている。したがって、その解体が内政上の問題だけにとどまるのか大いに疑問だと彼は述べた。ヴラツコ・マチェックは、自分たちの要求はあくまでも国家の内部の統治構造の変更であり、「クロアチアの切り離し」論には与しないことを強調した。彼は9月9日のザプレシッチの演説でこう述べた。「我々の望みは国家の解体ではない。我々はこの国家の外に出て行くつもりはない。ただクロアチア人はその土地の上では支配者にならなければならない」<sup>85</sup>。もっとも、「クロアチアの切り離し」論はクロアチア人の分離志向を牽制するためにこれまでも意図的に放たれたことのある議論であった。今回もまたそうであり、農民・民主連合の指導部がクロアチアの分離独立を明確に否定したため、政権内部で真剣に取り組まれるには至らなかった<sup>86</sup>。

## 6 「農民・民主連合」の闘争戦術とその結果

ベオグラードでは、裁判所が6月20日の犯行について、プーニシャ・ラチッチに対する審理を始めていた。検察側は急進党議員のトモ・ポポヴィッチと民主党議員のルーナ・ヨヴァノヴィッチに事情聴取をおこない、9月3日、この二人の議員の起訴を決めた。ポポヴィッチはステパン・ラディッチを対象としたプーニシャ・ラチッチの殺人未遂の幫助、ヨヴァノヴィッチはイワン・ペルナルの殺人未遂の容疑である。同日ポポヴィッチとヨヴァノヴィッチは身柄を拘束された。ベオグラードでは、これで6月20日の事件を当初から「組織的な犯行と」と主張していた農民・民主連合の議員はいくらか満足するのではないかという観測が流れた<sup>87</sup>。

しかし、ザグレブとベオグラードとの没交渉の状態は改まらなかった。9月中旬、農民・民主連合は国民に向けたメッセージを発表したが、それは、「暴力と不平等に基づく現在の支配体制に責任を負う政府および与党の代表とはいかなる社会的なコンタクトも断つ必要がある」と述べ、国民議会での闘いは不可能になったので、農民・民主連合は別の形の闘いを選択せざるをえなくなったと宣言した<sup>88</sup>。

10月12日、ベオグラードの国民議会は定例会議を始めたが、農民・民主連合の議員はこれに参加しなかった。ザグレブでは10月19日、農民・民主連合の幹部議員が会合を開き、二日後に予定されている政治集会の打ち合わせをしていた。10月21日、シーサクで開かれた農民・民主連合の政治集会は5万人に近い参加者を集め、大成功を収めた。農民・民主連合の新議長のマチェックは、セルビアの支配層に対し自分たちがもつあらゆる手段で闘いを挑むと宣言した。もう一人の議長のプリビーチェヴィッチは、ブレチャニンのセルビア人とクロアチア人との連帯を強調し、こう述べた。

「人民の一体性を完全に支持するセルビア人はクロアチア主義の表出を喜ばなければならない。なぜなら、それはセルビア主義の別名だからだ。クロアチア主義の表出を邪魔するセルビア人はクロアチア人を支配しようと

するセルビア人だけだ」<sup>89</sup>。

ベオグラード政府は、農民・民主連合が成功を収め、多数のプレチャニンを動員したことに不快感をもった。6月20日の殺人事件以降、急進党と民主党がプレチャニンの居住地域で直面していた頭の痛い問題は、離党者の増加と地方組織の分裂であったからである。党組織の弱体化はこの秋に実施された地方議会の選挙結果に直ちに影響した。

10月27日、ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは「オープンチナ」と呼ばれる末端の地方単位の選挙が実施された。ボスニア・ヘルツェゴヴィナはセルビア人、クロアチア人、イスラム教徒のスラヴ人の混住地域だが、セルビアの支配層は強いなわばり意識をもっていた。しかし、選挙の結果、農民・民主連合は1111の議席を獲得した。これはユーゴスラヴィア・ムスリム機構1480、急進党1357に次ぐ議席数であった<sup>90</sup>。農民・民主連合は総議席数の23.2%を獲得し、これは前回の国政選挙の結果（クロアチア農民党と独立民主党で18.9%）と比べると大きな前進であった。これに対し急進党は後退し、首都のサラエヴォの議席ではムスリム機構11、クロアチア農民党7に対し、急進党は6と敗北を喫した。ベオグラード政府はこの結果にショックを受けた<sup>91</sup>。

農民・民主連合の躍進と急進党の後退は、11月18日にダルマチアのスプリットで実施された市議会選挙でもっと顕著に現れた。農民・民主連合は41議席中23議席と過半数を制したのに対し、急進党は2議席にとどまった。クロアチア連邦主義党も7議席を獲得した。注目すべきは共産党が名称を変えた共和主義労農同盟も7議席を獲得したことであった<sup>92</sup>。

ベオグラード政府の中には農民・民主連合に対して強権的措置の検討を提起する閣僚もいた。彼らが念頭に置いたのはいわゆるオブズナーナ（「国家保安法」）の適用である。農民・民主連合は1924年のクロアチア共和農民党と同じような政治路線を歩んでおり、シーサクの政治集会はこのことを如実に示しているというのが彼らの主張であった<sup>93</sup>。しかし、これとは逆に、急進党の中には農民・民主連合を政権に取り込むべきだという意見も

根強くあった。パシッチ派が根城とする党総務会は、農民・民主連合に対し、現在の政権への参加もしくは別の連立政権への参加を呼びかける書簡を送った<sup>94</sup>。ヴキチェヴィッチ派と距離を置く「中枢派」のミラン・スルシュキッチは10月下旬、もっと具体的な提案をプリビーチェヴィッチに提示した。国王の信任の厚い近衛隊長のペータル・ジフコヴィッチ将軍を首相とする内閣を形成し、スルシュキッチらとともに農民・民主連合がこれに参加するという案である。しかし、プリビーチェヴィッチはこれを断った<sup>95</sup>。

農民・民主連合はこの間、セルビアの諸政党とは交渉をしないという態度を頑なに維持した。ベオグラードの週刊誌『ヴレーメ』の特派員の取材に応じてマチェックが述べた言葉はセルビアの諸政党に対する彼らの態度をよく示している。「あちこちで何度も述べているように、もはやベオグラードとは話し合いはあり得ない。その理由はあそこにはヨーロッパ型の民主主義が前提とする政党がないからだ。ベオグラードで政党と呼ばれる集団はおしなべてただ一つの項目からなる綱領をもっている。それは権力である。セルビアではいかなる政党も政権に参加して初めてそれなりの数の議員を獲得できる。セルビアではいかなる政党も政権の座にいないれば多数の議員の獲得どころか、それなりの数の議員さえ維持できない。だとすれば一体どの政党と話し合いができるというのだろうか」<sup>96</sup>。

セルビアの諸政党との関係を断ち、議会のボイコットを続けた農民・民主連合は、その目標とする国家制度の変更をどのような方法で実現しようと考えていたのか。ここで重要な点は、農民・民主連合の指導部はあくまで合法的で穏健な方法によって闘争を導こうと固く決意していたことである。彼らは議会闘争を放棄したからといって、民衆を動員してラジカルな直接行動に訴えることは夢にも考えなかった。そのような行動を計画すれば、強権的取り締まりの口実を政権側に与えることになることは明らかであった。それゆえ、クロアチア農民党の指導部は支持者、とくに若者層に対し政府側への反抗を自制し、過激な行動に走らないように何度も訴えた。

農民・民主連合の指導部が念頭に置いていたもう一つの方法は、国民とならぶ「第二の憲法的ファクター（主権の担い手）」と呼ばれた国王の協力を得ることであった。実際それは彼らに残されていた唯一の方法であった。それに憲法上国王が有していた権限を考えれば、どのような解決策も国王の関与と承認がなければ実行に移されることはあり得なかった。もっとも、これまでの国王の政治的関与は政党間の協議を前提とし、これに承認ないし拒否を与えるという方法で実現されてきた。しかしながら、セルビアの諸政党との交渉を否定した農民・民主連合はこのような手順を踏むのではなく、国王の直接的関与を期待した。いいかえると、国家制度の変更に関して国王と直接的に協定を結び、これを国王がセルビアの諸政党に否応なく承諾させるというプロセスの実現を望んだ。

ベオグラードの諸政党の指導者はザグレブ側のねらいをよく承知していた。農民・民主連合の指導部が望む解決の手続きは、セルビアの諸政党の関与を最小限に抑え、場合によっては彼らの関与をまったく排除しようとするものであった。ベオグラードでは、6月20日の事件以来、国王は政党政治を否定し独裁制への移行を検討しているとの観測があり、現実的にもその可能性は排除できなかつた<sup>97</sup>。もし国王が国家危機への直接関与をきっかけに独裁制の実行に踏み切れば、それはセルビアの諸政党にとっては最悪の結果となる。それゆえ、彼らはこのプロセスの実現を何としてでも阻もうとした。急進党や民主党は対話を拒む農民・民主連合の指導部の態度を非難したが、同時に何とかして彼らとの接触と交渉を実現したいとも考えていた。これから始まるかもしれない政治的ゲームの蚊帳の外に置かれられないようにするためである。彼らの中に事あるごとに農民・民主連合に理解を示し、ザグレブに秋波を送る者がいたのはその表れであった。

ザグレブでは12月1日、新たな騒乱が発生した。この日は「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」の10回目の建国記念日であった。大聖堂の入り口の前ではザグレブ駐留部隊の将校と行政官が勢揃いし、カトリックの司祭による記念のミサが始まるのを待っていた。ところが、こ

のとき塔の上にいる二人の若者が二枚の黒い旗をバルコニーに掛けた。一枚には議会で殺人事件が起こった日である「1928年6月28日」と書かれ、もう一枚には統一国家の建国が宣言された日の「1918年12月1日」が書かれていた。若者は大きなクロアチア国旗を手にしていて、3枚の旗は塔から落ち、うち2枚が将校団の頭上に落下した。これを不快とした司令官のリュボミール・マティッチは将校らにこの場を立ち去り、東方正教会へ行くことを命じた。行政官もこれに追従した。二人の若者は直ちに警官によって取り押さえられた。警察署に連行される二人のあとをクロアチア人の若者が徒党を組んで行進し、まもなく衝突が発生した。その結果、警官の発砲により、一人が死亡、二人が重傷を負った<sup>98</sup>。

翌12月2日、農民・民主連合はパクラツで大規模な政治集会を開いたが、集会が始まる前に事件が起こった。近郊の村から200人あまりのクロアチア人がパクラツの会場へ向かっていたところ、オープンチナ長官のサヴァ・コスティッチがクーニェヴァツという村で彼らに停止を命じ、武器を所持していないか憲兵隊に調べさせた。このあと彼らが丸腰であることを見たこの村の急進党員は途中で待ち伏せし、斧や鋏で襲いかかった。5人のクロアチア人が重傷を負い、10人あまりが軽傷を負った。それゆえ、この日の主要な演説者の一人のプリビーチェヴィッチは直接襲撃に加わった急進党支持者を強く非難するとともに、その背後にいるセルビアの支配層を、武力でプレチャニンに対する支配を維持しようとしていると批判し、こう述べた。「国家の力は武力によってではなく国民の満足に基づく。国民が満足しない帝国はいずれも崩壊した」<sup>99</sup>。

ベオグラード政府は12月5日、クロアチア人による抗議運動の取り締まりに消極的であったザグレブ行政区の知事ペータル・ズレラツを更迭し、セルビア出身の現役の陸軍大佐であるヴォイン・マクシモヴィッチを知事代行に任命した。現役武官のマクシモヴィッチの指名によって、政府側は騒乱が起こった場合には武力による鎮圧も辞さない態度を示した。ところが、マクシモヴィッチは法律の定める長官の資格（法科の卒業で国家

試験に合格していること)を有する人物ではなかったため、農民・民主連合のメンバーが主導権を握るザグレブ行政区の行政委員会はこれを根拠として政府側の決定に激しく反発し、国家評議会に提訴をおこなった<sup>100</sup>。

もっとも、クロアチア情勢に対する与党側の態度は一枚岩ではなかった。与党の一角を占める民主党では、党首のダヴィドヴィッチが総務会で民主党はそのような措置は聞いていないと発言し、マクシモヴィッチの任命を支持しない態度を示した。これには背景があった。国王による独裁制への移行が現実味を帯びてくる中でダヴィドヴィッチら民主党指導部は、進むべき道はやはりザグレブとの協定しかないと判断し、何としても農民・民主連合の指導部とコンタクトをとりたいと考えていた。ダヴィドヴィッチは1928年11月の段階で重大な方針転換を決意し、これを伝える書簡を農民・民主連合の指導部に送った。8月1日に彼らが採択した決議を受け入れ、これを土台に交渉をおこないたいと申し出たのである。農民・民主連合の指導部はこれを大きな前進と評価したが、同時に何か政府に反対する行動をとるよう勧めた。これは民主党に「変化の証し」を求めたものであり、ダヴィドヴィッチはこれに応えようとした。マクシモヴィッチの任命の反対はその第一弾であった<sup>101</sup>。

ダヴィドヴィッチは農民・民主連合の信頼を得るため、政府に圧力をかけた。12月7日、彼は首相のコロシェツに書簡を送り、その中で民主党が政権参加の際に求めた政策(農民の債務の清算、ダルマチアの農地改革、腐敗防止法の制定など)が何一つ実現していないことを批判し、民主党に何の断りもなくマクシモヴィッチの指名を決めたことに遺憾の意を伝えた。もっとも、これはコロシェツにとっては言いがかりに等しかったはずである。なぜなら、ダヴィドヴィッチは民主党から起用された閣僚の存在と責任を無視していたからである。しかし、ダヴィドヴィッチは党の総務会と議員総会の支持を取り付けて独自の行動を推し進めた。彼は、それが最短の解決への道であるならば、この際農民・民主連合が求めた議会の解散と選挙の公示を認めてもよいと公式の場で発言した。ダヴィド

ヴィッチは12月27日の国王との会談ではザグレブとの話し合いと協定成立の条件を提起した。ここでダヴィドヴィッチは農民・民主連合の要求を満たすため、宮廷で検討されていた案よりもずっと広範な自治権を認める案を提出したといわれる<sup>102</sup>。

12月30日、ダヴィドヴィッチの圧力に堪えかねた首相のコロシェツは内閣総辞職を表明した。彼は辞任の理由書の中でクロアチア農民党の要求は受け入れがたいと述べた。国王は1929年の年明け早々にコロシェツの辞任を認め、政党指導者との政権協議を開始した。

宮内相のドラゴミール・ヤンコヴィッチはザグレブの農民・民主連合に電報を打ち、ヴラツコ・マチェックとスヴェトザール・プリビーチェヴィッチに1929年1月4日に宮廷に来るように求めた。マチェックは1月4日の11時に、プリビーチェヴィッチは16時に国王との謁見が設定されていた<sup>103</sup>。二人はこの招請を受け入れた<sup>104</sup>。

これは待ち望んだ機会であった。彼らは直接国王に危機の解決策を具申できるチャンスを得たと考えた。しかし、ここで注目すべきは二人が必ずしも一致した見解をもっていなかったことである。国王との謁見に当たり、マチェックは、現在の国家制度を根本的に改め、それぞれの地域の国家のおよび文化的歴史的な独自性を立法府と行政府を設置して確立することを要望した。これは実質的には連邦制の導入を意味していた。これに対し、プリビーチェヴィッチは憲法の改正を求めたが、具体的にどこをどのように変更すべきなのかを述べなかった。彼はそれを議会の仕事と考えていたようである。プリビーチェヴィッチは、憲法改正議会のための選挙を告示する内閣を直ちに形成するよう国王に求めた。さらに危機がいつもベオグラードで解決されるという見方を否定するため、国王はザグレブに来てそこから指揮を執るように提案した。翌日（1月5日）朝、マチェックは再び国王に呼ばれた。マチェックは前日と同じ見解を述べた上で、政党に所属しない人物による内閣を形成し、これに国王の信任を拠り所に断固とした態度で国家制度の変更（つまり連邦制への移行）を実行させるべき

だと提案した<sup>105</sup>。

マチェックとの話し合いが終わると、国王は急進党代表のアツァ・スタノヴィッチに会い、次に民主党代表のリュバ・ダヴィドヴィッチに会った。国王は二人に国家制度に関するマチェックの提案を伝え、各党の意見を示すよう求めた。急進党は直ちに開いた議員総会でマチェック案を満場一致で否決し、これでは協議に応じることはできないと伝えた。民主党のダヴィドヴィッチはこの提案は受け入れられないが、もう一度話し合えばマチェックはこの案を撤回すると確信しているので、彼らとの話し合いは続けたいと国王に回答した。民主党の総務会もこの見解を了承した<sup>106</sup>。

1月5日夕刻、宮廷は次の声明を発表した。「政党代表者との協議の結果、現下の危機の解決策について各政党の間には相反する見方が存在することが明らかになった。しかもこの見解の相違は国家制度の問題の評価にも及んでいる。それゆえ、国家と国民の統一を完全に保証するような解決策は議会にはない」<sup>107</sup>。これは国王が向かう方向を予告するものであった。

1月6日、国王は公告を発表した。その中で国王は、「国民と国王との間に介在物を置いてはならないときが来た」と述べ、1921年6月28日公布の憲法の停止と1927年9月11日選出の国民議会の解散を通告し、これからは国王自身を唯一の立法者とし、法律は勅令の形式により制定すると宣言した。その上で国王は、すべての行政官ならびにすべての国民にこの決定に従って行動することを命じた。国王は近衛隊長のペータル・ジフコヴィッチ將軍を首相に任命し、自らが選任した閣僚からなる内閣を発足させた。このあと、国王は「国王権力に関する法律」と「新国家保安法」を公布した。前者は憲法に代わる法律であり、後者は既存のオブズナーナ（国家保安法）を強化した治安維持法である。国王はさらに「オープンチナおよび行政区の自治に関する法律」を公布し、ベオグラード、ザグレブ、リュブリャナを国王が行政府の首長と幹部行政官を任命する直轄地とした。

国民は第一報の段階では国王がとった措置を好意的に受け止めた。とくにクロアチア人は憲法の廃止と議会の解散を単純に喜んだ。なぜなら、ク

ロアチア人代表の参加なしに採択されたヴィードヴダン憲法は彼らにとって、セルビアによる支配と抑圧のシンボルだったからである。前年の6月にクロアチア人議員の殺傷の場になった国民議会の解散も待ち望まれていたことであった。国王はクロアチア人の願いをようやく聞き入れてくれた。彼らは最初そう考えたのである。このことは農民・民主連合の指導部も同様であった。マチュックでさえ国王は自分が提案した方向に進もうとしていると考え、「クロアチア人は自由なクロアチアの支配者となる」というクロアチア人の長年の理想の実現が近いと楽観的な期待を漏らしていた<sup>108</sup>。

だがこれは明らかに早とちりであった。国王が廃止したのは、言論、出版、集会、結社の自由といった憲法が保証していた市民的自由権だけであった。国王が矢継ぎ早に出した措置の意味を国民はすぐには理解できなかったのである。1月23日にはすべての政党に解散が命じられた。新しい内閣は国家制度の変更を提起することはなく、マチュックが求めた連邦制の導入はついに実現しなかった。

## 7 国王独裁制への道

国王が様々な法律を同時に発表したことから明らかなように、1月6日に宣言された国王独裁制はかなり以前から周到に準備されたものであった。1月4日と5日の政党指導者に対する意見聴取は単なる儀式にすぎなかったといってよい。本稿を結ぶにあたり、この国王独裁制への道を改めてたどり、なぜそれが易々と成就したのかを考察したい。

国王が最初に非議会主義的な解決策のアイデアを披露したのは、実は1928年の7月末に遡ることが明らかになっている。それはちょうどハジッチ将軍を首相候補者とする「政党から中立な政府」形成の試みが失敗に終わったときであった。国王は与党四党の代表者との会議の場で、「我が民族は10年経ってもまだ共通の伝統をもつに至っていない」と嘆き、「憲法上期

待されている調停者としての役割の外に出ることもあり得る」がどうかと発言した。国王はこれによって、政党間の利害の調停者ではなく、自らが政治的支配者となる案を示唆した。しかし、与党四党は、政党抜きに危機を解決しようとする国王の計画を受け入れる準備ができていなかった。国王もこのときは独裁制の導入は時期尚早とみて、コロシェツに組閣権を与え、与党四党の政権を維持した<sup>109</sup>。しかし、彼は自らのアイデアを撤回したわけではなく、少し準備の期間をもとうとしたただけであった。

他方、8月1日の決議で農民・民主連合は国家制度の変更を求める立場に転換したが、同時にセルビアの諸政党とはいっさい交渉をしないという立場を明確にし、自ら問題解決の可能性を狭くする道を選択した。農民・民主連合は議会闘争を放棄したとはいえ、民衆の動員や暴力的手段に訴える意思はまったくなかった。彼らはいくまで合法的・平和的な闘争しか考えていなかった。そうすると唯一の解決の道は国王の協力を得ることであった。それは、国王と直接に協定を結び、これをセルビアの諸政党に受け入れさせることであった。実際、国王が憲法上もつ役割と権限を考慮すれば、いかなる解決策も国王の承認なしには実現不可能であった。

しかし、このシナリオの実現には大きな障害があった。第一に農民・民主連合は国王と直接交渉をおこなうことはできなかった。国王との話し合いは、彼が求めた場合にのみあり得るだけであった。第二に国王は現在の憲法と国家制度の支持者であることは明らかであった。したがって、かりに国王との話し合いが実現したとしても、通常の状態では国王が農民・民主連合の要求を受け入れるとは考えられなかった。唯一考えられる可能性は、国王が彼らに譲歩を余儀なくされるような何らかの状況が発生することであった。たとえば、この国に影響力をもつ外国からの圧力である。しかし、それは有り体に言えば、黒船が到来するか、神風が吹くのを待つようなものであった。

それでも国際的ファクターの重要性を認識する農民・民主連合は、欧州諸国の世論および政府関係者に自分たちの主張を訴え、彼らの理解と支持

を得ようと機会あるごとに努力をおこなった。彼らはその際、ユーゴスラヴィアの問題の解決はヨーロッパ全体が関心をもつべき重要性があると注意を喚起した。農民・民主連合は主としてユーゴスラヴィアの友好国に働きかけをおこなった。なかでもこの国に大きな影響力をもつフランスとイギリスを重視した。しかし、これらの諸国はユーゴスラヴィアの安定性を求め、その現状の維持を支持していた。これに対して、農民・民主連合の代表は自分たちの要求はユーゴスラヴィアの解体ではなく、内部の国家制度の変更であることを強調した。諸外国が求めるユーゴスラヴィアの安定は国家制度の再編を実施しなければ保たれてなくなっているというのが彼らの主張であった。もっとも、そうすると、それは主に国内問題であり、うかつな内政干渉を避けるために、諸外国はますます慎重な立場をとらざるを得なかった<sup>110</sup>。

国内では農民・民主連合は国王への信頼を表明し、彼が危機の解決に向けて直接的に行動を起こすのを待った。しかし、ベオグラードの国王はその気配を見せなかった。それゆえ、マチュックは10月21日にシーサクで開かれた政治集会でこう述べた。「亡くなった親愛なる議長(ラディッチ)はあの殺人事件のあと直ちに次のようなスローガンを作成した。『もはや何もない。法律もない。憲法もない。ここには国民と国王がいるだけだ。』しかし、友よ、兄弟よ、我々は目を大きく開き、耳を澄ませ、すでに3ヶ月いや4ヶ月も待ち続けているが、国王はまだ動かない。そうすると、思うに最後に残るのは国民だけになってしまう」。同様の口調でプリビーチュヴィッチもこう述べた。「6月20日の事件以来、我々は合法的手段による闘争を維持してきたし、これからもこの原則を守っていくつもりだ。しかし、この合法的手段によっては何の成果も得られないということになると、別の手段をも検討せざるを得なくなる。なぜなら、国民が国王陛下と呼ぶ方は世界でもっとも年長な方だからだ」<sup>111</sup>。しかし、彼らはこのように言葉の上で苛立ちを表明するのが精一杯であり、実際に何か行動を起こすことはなかった。

農民・民主連合の指導部はセルビアの諸政党とは交渉をしないという態度を貫いたので、状況は膠着状態が続いた。しかし、この均衡はベオグラードの方から破られることになった。1928年秋の地方議会選挙での敗北によって、急進党と民主党は次第に焦燥感を募らせた。この結果、彼らはもしかして農民・民主連合と国王との直接交渉が実現するのを恐れ、政権をめぐるゲームから排除されないように、農民・民主連合に競うように秋波を送り始めたのである。より強い危機感をもった民主党のダヴィドヴィッチは農民・民主連合の指導部に対し、8月1日の決議を交渉の土台として受け入れることを伝えるに至った。彼らの信頼を得るため、12月初めにクロアチアで起こった騒乱をきっかけにダヴィドヴィッチはコロシェツ政権に強い揺さぶりをかけ、1928年末についてこれを辞任に追い込んだ。しかし、これは国王にとっては計画を実行に移すチャンスの到来を意味した。

1929年の年明け早々、国王は慣例にしたがって政党指導者からの意見聴取を開始したが、最初に宮廷に呼ばれることになったのは農民・民主連合の二人の代表であった。ザグレブの農民・民主連合の指導部は、彼らが望んだプロセスが始まるのではないかと密かに期待した。しかし、この期待には現実的裏付けがなかった。すでに述べたように、農民・民主連合の望んだプロセスが実現するには国王が彼らに譲歩を強られるような状況が必要とした。ところが、状況はそれほど深刻ではないと国王は判断していた。それゆえ、彼は予定通り農民・民主連合に対して妥協のない措置をとることができた。農民・民主連合は国王が国家制度の変更に着手することを期待したが、国王による個人独裁制の準備は最終段階に入った。

実際、このとき国王には有利な要因がそろっていた。第一に農民・民主連合とは対照的に国王は同盟諸国の強い支持を取り付けていた。たしかに農民・民主連合は8月1日の決議によってラジカルな態度をとるようになったが、彼らのラジカル化は主として言論上のものだと国王は見ていた。それゆえ、国王はフランス政府関係者にこう説明し、彼らの不安を解

くことができた。「若干の緊張はあるが、クロアチアの状況は落ち着いており、その統治機構は大きな困難なく機能している。農民・民主連合の闘争は言論を主要な手段とし、直接行動を伴うものではない。クロアチア人は平和主義者で分離独立の行動をとる危険性はない」。第二に農民・民主連合がセルビアの諸政党とは交渉をしないという立場を貫いている限り、政党間協議による協定の成立はあり得ず、したがって、政党勢力の結束によって国王による権力掌握の計画が挫折させられることは考えられなかった。しかも、セルビアの諸政党の中には急進党と民主党の根深い対立があり、さらに両党はそれぞれ内部に深刻な派閥対立を抱えていた。それゆえ、コロシェツ政権が倒れたあと、国王は政党間の意見対立を見越した上で政党指導者からの意見聴取にはいることができた。第三に国王は軍部を完全に掌握していた。以上のことから、国王は安心してその計画を実行に移すことができたのである<sup>112</sup>。

最後に農民・民主連合側の大きな問題として、国家制度を具体的にどのように変更するのかについて公式見解を詰め切れなかったことがある。農民・民主連合が8月1日の決議によって表明した和解の条件は、「すべての諸地域の完全な対等・同権を保障する新しい国家制度」への変更であったが、この決議は具体的にどのように国家制度を変更するのかについてはまったく触れていなかった。決議はそれをラディッチの復帰を待つて具体的に決定をすると述べているだけだった。8月1日の決議が一般的な原則を掲げるにとどまったのはクロアチア農民党と独立民主党の両党が一致した国家像をまとめることができなかつたからであった。

では両党は実際にはこれをどのように考えていたのか。決議が一般的な原則を掲げるにとどまったため、その具体的な解決策は様々な可能性があった。このため、クロアチア農民党の指導者間でさえ必ずしも一致した見解があるとはいえない有様であった。しかし、マチェックの見解を中心に最大公約数を抽出するとすれば、それは、現在の単一国家を立法府と行政府をもついくつもの自治単位からなる連邦国家に再編することだという

ことになるだろう。クロアチア農民党にとっては、これ以下の条件ではいかなる解決策もあり得なかった。

たとえば、マチェックは、ラディッチの死後一ヶ月後の演説でこう述べた。「我々の望みは国家を壊すことではない。我々は国境の外に出ることはしない。しかし、この国家の境界の中では、クロアチア人はクロアチアの土地に対する唯一の支配者とならなければならない。それは自分の家と土地に対する支配者になるのと同じだ。クロアチア人は自前の議会と行政府を持たなければならない。我々は国家に共通の仕事を持つことになるが、この仕事においてはあらかじめ対等平等が完全に保証されなければならない。決してこの10年間のように少数者が多数者を支配するということがあってはならない」<sup>113</sup>。

マチェックが連邦制の導入を明確に求めたのに対し、単一民族と単一国家の確立を党是とする独立民主党のプリビーチェヴィッチはいくらクロアチア農民党との共闘を重視していたとしても、決して連邦制国家に同意するまでは至らなかった。彼の考えはせいぜい「地方自治権の確立」のレベルにとどまったようである。

たとえば、1928年12月のことであるが、プリビーチェヴィッチは連邦制を主張するようになったとある外国雑誌（『ノイエ・フロイエ・プレス（新しい自由報道）』）が報道したとき、プリビーチェヴィッチはこれを党の機関誌で否定してこう述べた。「私は連邦制国家について語っていない。私は、我々の目的は連邦制の導入だと述べたことは一度もない。我々が求めるのは対等同権である。そのもとでは、あらゆる地域とあらゆる部分の国民が全体国家に不可欠ではない事項について完全に自律的に意思決定をおこなうことになる」。これに続けてプリビーチェヴィッチはこう述べた。

「我々の国家制度はまったく新しい基礎の上に再編成されなければならない。新しい国家は、完全な対等同権を保証する構造に変えられねばならない。それがどういう名称で呼ぶのがふさわしいか、連邦制と呼ぶべきか、広範な自治と呼ぶべきか、それは学問上の問題である。問題は形式ではな

く、中身である。我々はこの問題について何も結論を出していない。時が来れば必要な結論を出すことになるだろう。しかし、現時点ではまだそれは必要ではない<sup>114</sup>。

このように独立民主党の指導者は決議が掲げた原則をどのような国家制度で実現するのか明確に述べることはなかった。これはクロアチア農民党の指導者との大きな相違である。プリビーチェヴィッチらは決議が掲げた原則を繰り返すにとどまり、問題の細部に言及することを避けた。これは何よりもクロアチア農民党と独立民主党との見解の相違が浮き彫りになるのを回避しようとしたためであるが、もう一つの要因として独立民主党の内部にも見解の不一致があり、党の団結を保つためその表面化を避けようとする配慮が働いたからでもあった<sup>115</sup>。党首のプリビーチェヴィッチにとって、8月1日の決議ではっきりしていることは憲法を修正することであった。彼はこの点は一点の曇りもなく、繰り返し言及した。しかし、憲法のどこをどう修正すべきなのかを明らかにすることは常に躊躇した。

とはいえ、以上で見たことから明らかなように、マチュックとプリビーチェヴィッチの間には疑いなく求める国家像に相違があった。プリビーチェヴィッチは憲法修正と地方自治権の拡大の点まではマチュックに接近できても、独立民主党の綱領である単一国家主義を否定することになる連邦制の導入には同意できなかった。両者の国家像の隔たりはクロアチアのクロアチア人代表とセルビア人代表の見解の相違といってもよいだろう。そうすると、ベオグラードの国王が百歩譲って国家制度の変更に同意したとしても、そのあとどのようにこれを具体化するかをめぐって両者の間で争いが起きる可能性は大いにあった。農民・民主連合が求めた国家制度の変更はこの点でまだ実現の条件が熟していなかった。これもまた国王による個人独裁制導入計画の成就を容易にした要因といえよう。

## 注

- 1 以上、Branislav Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, Institut savremenu istoriju, Beograd, 1979, p.234。なおかつてスロヴェニア人民党はスロヴェニアの行政区に立法権を求めていた。しかし、この政権協定によって、コロシェツはこの要求を取り下げ、自治権の拡大で満足することにした。
- 2 *Ibid.*, p.234.
- 3 たとえば、パヴレ・ラディッチは投石にあつて頭部と顔面を負傷し、アウグスト・コシュティッチはスコピエで憲兵に捕まえられて、列車に押し込まれ、ベオグラードに送還させられた (Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, Školska Knjiga Zagreb, 1992. Rudolf Horvat, p.348, Hrvoje Matković, *Povijest Hrvatske Seljačke Stranke*, Naklada Pavičić, Zagreb, 1999, p.225)。
- 4 Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, p.352.
- 5 地盤とするセルビアでは、17の選挙区うち15の選挙区で急進党は複数の候補者名簿を提出し、中には3ないし4つの候補者名簿を提出した選挙区もあった (Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.237)。
- 6 民主党も急進党と同じく党内対立があり、ヴキチェヴィッチ内閣に入閣しているマリノヴィッチのグループと党首のダヴィドヴィッチを中心とするグループに分裂していたが、両派は相打ちを避けて複数の候補者名簿を提出することをしなかった (*ibid.*, p.237)。
- 7 ただし、クロアチアの首都ザグレブでは、ザグレブにより多くの税負担を求めた行政区議会でのラディッチの路線が有権者の反発を招いて、クロアチア農民党は惨敗し、クロアチア・ブロックは2議席を独占した。その一人はクロアチア連邦党のアンテ・トルムビッチであり、もう一人はクロアチア権利党のアンテ・パヴェリッチであった。後者はのちにウスタシの指導者となった人物である。
- 8 これにはもう一つの要因として、マケドニアとサンジェクのアルバニア人やトルコ人を支持基盤とするジェミエット党が党首の逮捕のために候補者名簿を提出できなかったという事情があった (*ibid.*, p.238)。
- 9 モンテネグロの選挙区ではモンテネグロ連邦主義党が後退し、急進党は議席は1議席増の3議席を獲得した。このとき新たに当選した三番目の候補者こそが翌年の6月、国民議会でピストルを発射してクロアチア農民党議員を殺傷したプーニシャ・ラチッチであった (*ibid.*, p.238)。
- 10 Branislav Gligorijević, *Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, Institut savremenu istoriju, Beograd, 1970, p.488.
- 11 両者の会談は、ベオグラードの国民議会の建物の中でおこなわれた。この日の午前中、ステパン・ラディッチは独立民主党の議員クラブの部屋を訪ね、スヴェトザール・プリビーチェヴィッチと小一時間話し合った。会談を終えて部屋から出たラディッチは待ち受けていた記者たちにこう語った。「これはまだ序曲にすぎない。オペラはあとに控えている。二人の古い友人が再会し、新しい仲間になった」。ラディッチとプリビーチェヴィッチの間に戦術の違いはないのかという記者からの問いに対して、ラディッチは「我々の間にはまったく戦術の相違はない」と答えた。プリビーチェ

ヴィッチはラディッチとの会談についてこう述べた。「我々は共同の仕事語り合った。若い頃一緒に仕事をした二人の男が今日再会し、この国に文明を確保するために一緒に働こうと語り合った」。同日午後、今度はプリビーチェヴィッチがクロアチア農民党の控え室を訪ね、ラディッチと話し合った。以上、Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, p.361、Matković, *Povijest Hrvatske Seljačke Stranke*, p.233、Hrvoje Matković, *Svetozar Pribičević: ideolog-stranački vođa-emigrant, Hrvatska Sveučilišna Naklada, Zagreb, 1995*, p.192、による。

なお興味深いのは、事前の打ち合わせでプリビーチェヴィッチは、ラディッチが先に独立民主党の控え室を訪問することを求め、ラディッチがこれを承諾したことである (ibid., p.192)。政党の規模や議員数からいえば、独立民主党よりもクロアチア農民党の方がずっと大きかったので、プリビーチェヴィッチが先にラディッチを訪問してもおかしくはなかった。ラディッチがあえてプリビーチェヴィッチの顔を立てたことには、名を捨てて実を取ろうとした判断があった。すなわち、ラディッチの戦略はセルビアを孤立させ、包囲網を敷くことであり、そのためにはベオグラードの政権を強化しかねない独立民主党と民主党の合同計画を挫く必要があった。したがって、ラディッチはこの交渉がまとまらないうちに独立民主党を自陣営に取り込んでおいた方がよいと考えた。ラディッチはプリビーチェヴィッチとの会談を通し、クロアチア農民党と独立民主党の両党はこの先単独ではどのような政党の組み合わせにも加わらないことで合意し、これによって独立民主党は民主党と合体しないと言質をプリビーチェヴィッチから取り付けた。以上、Gligorijević, *Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, pp.489-490による。

12 Ibid., p.489.

13 Ibid., p.489、Matković, *Svetozar Pribičević: ideolog-stranački vođa-emigrant*, p.192.

14 以上、Gligorijević, *Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, pp.490-491.

15 Gligorijević, *Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p.492.

16 以上、ibid., p.492、Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.246。なおこの直後にも民主党は、国民議会の審議の過程で野党との協力関係を築く機会は何度かあった。一つは、10月26日にクロアチア農民党代表が選挙妨害を理由にヴキチェヴィッチの問責決議案を出したときである。民主党はこの年の2月に前内相のマクシモヴィッチの問責決議案を提出しており、このたびの選挙では野党と同様に急進側からの選挙妨害の被害に遭っていた。それゆえ、クロアチア農民党と農業者党はこの機会に民主党が反ヴキチェヴィッチの姿勢を示すことを期待した。ところが、民主党は採決に際し反対票を投じ、この決議案の却下に一役買った。もう一つの機会は、11月4日にクロアチア農民党が政府に対し、3日の期限を区切って「直接税に関する法律」案の提出を求める提案を議会でおこなったときである。この法律の制定は与党の公約に含まれていた基本政策の一つであり、民主党、ユーゴスラヴィア・ムスリム機構、スロヴェニア人民党も選挙運動の期間にはその実現に力を尽くす

- ことを有権者に約束していた。ところが、これら三党はこの提案を支持しなかった。このほか、外交問題に関する委員会の設置を求めた議会規程の改正案、農民の債務の清算に関する法律などクロアチア農民党が提案した議案に民主党はことごとく反対票を投じた。以上、*ibid.*, pp.245-246。
- 17 彼らの決議はこう述べた。「クロアチア農民党と独立民主党は農業者党とともに民主同盟に対して民主主義勢力を統合するため合同会派の結成を呼びかけた。この提案は原則的には受け入れられながら、政治戦術上の理由から未だ実現されるに至っていない。そこで、クロアチア農民党と独立民主党の両党は10月22日に民主同盟に提案した行動計画に基づいて『農民・民主連合』を結成し、民主主義ブロック形成に向けて大きな第一歩を踏み出すことにした」(Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, p.362)。
- 18 以上、Matković, Svetozar Pribičević: *ideolog-stranački vođa-emigrant*, p.194。なおこの申し合わせによって独立民主党と民主党との合同の可能性は完全に消えた。
- 19 同時代のジャーナリストであったヨシブ・ホルヴァートは、この国の建国以来、ラディッチとプリビーチェヴィッチの和解ほど人びとを仰天させ、当惑させた政治的事件はなかったと書いている (Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, August Cesarec Zagreb, Zagreb, 1990, pp. 328-329)。
- 20 農民・民主連合が結成された日の夜、クロアチア農民党と独立民主党の議員は夕食会を開いた。乾杯の音頭をとったラディッチはこう述べた。「私とプリビーチェヴィッチは30年前に一緒に仕事をした仲だが、その後に袂を分かった。これはよい経験だった。なぜなら、もしあのまま共に仕事を続けていたらいまこのような関係になることはなかっただろうと思うからだ」。プリビーチェヴィッチはこう返答した。「これまでベオグラードでは、『ラディッチと組んでプリビーチェヴィッチを叩く』か『プリビーチェヴィッチと組んでラディッチと闘う』といった手法がとられてきた。これからはそんなことは不可能になった。だから彼らに聞かせたい。我々はこの国の政治に参加したい。我々は未成年者ではなく、この国の共同所有者である」(Matković, *Povijest Hrvatske Seljačke Stranke*, p.236)。
- 21 詳しくは、Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, pp.363-364を参照。
- 22 以上、*ibid.*, p.364。
- 23 以上、*ibid.* pp.366-367。
- 24 *Ibid.*, p.370。
- 25 1の政権参加の問題については、ダヴィドヴィッチ支持の急先鋒であるミルティン・スタンコヴィッチは反議会主義的な政権からの離脱を求め、民主党はこのような反動的な政権に奉仕するよりは野党と連合し、広範な国民運動を組織すべきだと主張した。2の党内機関の意思決定のあり方については、議員総会が党の方針を決定していることは容認できないとし、総務会は議員総会に総務会のメンバーが投票権をもって出席することを決定した。3の農民・民主連合との関係については、民主党の政権参加が批判的になり、政権からの離脱が求められた。プレチャニンの連合戦線の形成は国益を損ねており、これはそれが形成された原因を除去して初めて解体させることができる。その意味で民主党は原則的な考えの表明ではなく、行動を起こすことが求められているという意見が提出された。以上、Gligorijević, *Demokratska stranka*

- i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.496。
- 26 以上、Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.246。
- 27 以上、Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, p.374。
- 28 以上、*ibid.*, pp.374-375。
- 29 以上、Gligorijević, *Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, pp.500-501。
- 30 以上、*ibid.*, pp.501-502。
- 31 *Ibid.*, p.504。
- 32 以上、Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, p.377。
- 33 以上、*ibid.* p.377。
- 34 以上、*ibid.* p.378。
- 35 以上、*ibid.* p.378。
- 36 以上、Gligorijević, *Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p.507。
- 37 以上、*ibid.*, pp.507-508。
- 38 *Ibid.*, p.508。
- 39 Matković, Svetozar Pribičević: *ideolog-stranački vođa-emigrant*, p.200。
- 40 この間の政権交渉の過程で農民・民主連合は、連立政権が実行すべき19項の基本政策をまとめていた。その主要なものは、徴税に関する法律の改正、憲法の規定に沿った地方自治の確立、行政区の区割りの変更、クロアチア人とスロヴェニア人の政府機関（監査機関、国家評議会、人民銀行、商工銀行、外交機関など）への対等な登用であった。これらはいずれも民主党の主張とも重なる政策であった。また国家制度の変更に関する要求は一つもなく、あくまで現行の憲法の枠組みの中での要求であった。以上、Gligorijević, *Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p.507。
- 41 *Ibid.*, p.509。
- 42 それゆえ、プリビーチェヴィッチはのちにラディッチを弁護し、民主党の政権参加を表明したダヴィドヴィッチの2月16日の声明を念頭に、こう述べている。「ダヴィドヴィッチがあのような声明をおこなわなければ、ラディッチは決して軍人政権など進言しなかつただろう」（*ibid.*, p.509）。
- 43 その一つの証拠は、民主党の閣僚が辞表を提出した2月初旬の国民議会での投票行動である。ヴキチェヴィッチは徴税に関する法案の上程を理由になお首相の座に居座っていたが、彼らはこの法案を否決することでヴキチェヴィッチを不信任とすることができた。ところが、ダヴィドヴィッチが反対票を投じることを呼びかけたにもかかわらず、民主党の議員総会は自由投票を決めた。実際にも民主党議員の多くは賛成票を投じ、法案を成立させるとともにヴキチェヴィッチ政権の延命を助けた。これはラディッチを失望させた。以上、*ibid.*, p.504。
- 44 プリビーチェヴィッチが後に語ったところによれば、政権交渉の過程で農民・民主連合が財務相や内相、外相などの重要な閣僚ポストを求めたことを、ダヴィドヴィッチは過大な要求だと反発していた。それゆえ、プリビーチェヴィッチは民主党を含め

- てセルビアの政党にとっては農民・民主連合はあくまで補完勢力であって対等な交渉相手ではなく、それゆえ、彼らはもともと農民・民主連合の要求を満足させる意思はなかったのだと解釈した。以上、 *ibid.*, p.510。
- 45 しかも61人中56人がセルビア人であった。
- 46 これを象徴的に示すのが第二次ヴキチェヴィッチでダヴィドヴィッチの側近であるミラン・グロルが教育相として入閣したことである。
- 47 Matković, *Povijest Hrvatske Seljačke Stranke*, p.243, Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.249.
- 48 議長のパリッチは、ラディッチが国王の名を不適切な場で用いたことを懲戒処分 の理由とした。すなわち、ラディッチはこう述べた。「我が国は裁判所を監獄の下に置 いている。これは事実上国王を監獄に入れているのと同じだ。この手続きによって、我 が国家はそれ自体が監獄になっているからだ。この状態が続けば、監獄を国王にする ことになる」 (*ibid.* p.401)。
- 49 以上、 Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, pp.379-380。
- 50 以上、 Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.253。
- 51 以上、 Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, pp.381-382。
- 52 Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.253。
- 53 以上、 Gligorijević, *Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p.516。
- 54 以上、 Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, pp.254-256。
- 55 *Ibid.*, p.256。
- 56 *Ibid.*, p.256, p.401。
- 57 以上、 Matković, *Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant*, p.204。
- 58 以上、 Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, p.385。なお4番目の「アドリア・ドナウ河畔」行政区とは、クロアチア、スラヴォニア、ダルマチアに加えて、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロ、ヴォイヴォディナ、およびスロヴェニア以外のすべてのプレチャニンの居住区を含むとする広大な行政区であった。
- 59 以上、 Matković, *Povijest Hrvatske Seljačke Stranke*, p.245。
- 60 以上、 Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, pp.253-254。
- 61 以上、 Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, pp.386-387。
- 62 以上、 Gligorijević, *Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p.517。
- 63 以上、 Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, p.387。
- 64 以上、 *ibid.*, pp.387-388, Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p.337。
- 65 以上、 Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, p.388, Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p.337。
- 66 以上、 Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, p.389, Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p.342。

- 67 以上、Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, p.389、Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, pp.342-343。
- 68 以上、Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, pp.390-391。
- 69 以上、Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p.346。
- 70 以上、Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, p.391、Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p.344、Matković, Svetozar Pribičević: *ideolog-stranački vođa-emigrant*, p.206。
- 71 以上、Svetozar Pribičević, *Diktatura kralja Aleksandra*, Globus, Zagreb, 1990, pp.61-62。
- 72 以上、Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, p.394。
- 73 以上、*ibid.*, p.394。
- 74 以上、*ibid.*, pp.397-398。
- 75 以上、*ibid.*, pp.398-399。
- 76 以上、Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, pp.262-264。
- 77 以上、Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, p.405。
- 78 以上、*ibid.*, pp.405-406。
- 79 以上、*ibid.*, pp.406-407。
- 80 クロアチアで一定の勢力を有していた民主党は6月20日の事件後、組織の分裂とクロアチア人党員の離党が相次いだ。民主党の離党者の中には農民・民主連合の支持に転じる者も多かった。これを評してプリビーチュヴィッチは、「民主党はクロアチアでは完全に消滅した」と述べた。以上、Gligorijević, *Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, pp.518-522。
- トルムビッチとパヴェリッチの農民・民主連合への参加について、プリビーチュヴィッチは、独立民主党はこの件を完全に承認しているというコメントを記者に述べた。独立民主党の機関誌はこれを「農民・民主連合の戦線はますます拡大している」との見出しで紹介した (Matković, Svetozar Pribičević: *ideolog-stranački vođa-emigrant*, p.212)。しかし、トルムビッチは連邦主義者であり、パヴェリッチに至ってはクロアチア主義の立場からクロアチアの分離独立をも主張する人物であった。したがって、このような人物の参加を歓迎するプリビーチュヴィッチの態度は、単一国家と単一国民の確立を党是とする彼の党のメンバーから見れば、ややナイーブに映るものであった。この点は後に独立民主党のメンバーから「誤った寛容さ」と批判の声が上がる一因になったように思われる。
- 81 以上、Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, pp.411-412。
- 82 以上、*ibid.*, p.412。
- 83 以上、Gligorijević, *Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, pp.527-528。
- 84 以上、*ibid.*, p.415。
- 85 Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, *ibid.*, p.416。
- 86 今回の事件のあと真っ先に「クロアチアの切り離し」を口にしたのは国王であった。

- それはちょうどステパン・ラディッチがベオグラードでの治療を終え、ザグレブに戻ることに決まったときであった。ベオグラードではラディッチがザグレブに戻るとクロアチアは独立か自治を宣言するのではないかという観測が浮上した。そのため、クロアチアの動きを牽制するため、国王は7月7日に諸政党の指導者を集めた会議の場で、連邦制を導入するくらいならクロアチアの分離を認めたいと述べた。これに対し、国王との謁見に際しプリビーチェヴィッチは、農民・民主連合の要求はユーゴスラヴィアの国境を越えるものだとの見方をきっぱりと否定した。以上、Svetozar Pribičević, *Diktatura kralja Aleksandra, Globus, Zagreb, 1990, pp.65-66.*
- 87 以上、Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu, p.417.*
- 88 Ljubo Boban, Ljubo Boban, Maček i politika HSS 1928-1941 1, Liber, Zagreb, 1974, p.30.
- 89 以上、Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu, p.420.*
- 90 選挙の結果をまとめると、各党の獲得議席は、ユーゴスラヴィア・ムスリム機構1480、急進党1357、クロアチア農民党839、農業者党597、農民・民主連合182、独立民主党90、クロアチア大衆党23、労働者党17、社会党7、ユダヤ党7、クロアチア農民党とユーゴスラヴィア・ムスリム機構の合同名簿7、その他136であった (ibid., p.421)。
- 91 以上、ibid., p.421。
- 92 以上、ibid., pp.421-422。
- 93 以上、ibid., pp.420-421。
- 94 Lazar Marković, *Jugoslavenska država i hrvatsko pitanje (1919-1929), Beograd, 1931, p.370.*
- 95 以上、Svetozar Pribičević, *Diktatura kralja Aleksandra, Globus, Zagreb, 1990, pp.87-88.*
- 96 Ljubo Boban, *Maček i politika HSS 1928-1941 1, p.30.*
- 97 国王はすでに1928年7月の時点で憲法を停止し、独裁制に移行する考えを与党指導者に打診していた。それはハジッチ將軍を首相とする「政党から中立的な政府」の形成が与党の抵抗によって挫折したときであった。しかし、このときは与党四党の指導者の強い反対に遭い、時期尚早と見た国王はこのアイデアに固執しなかった。以上、Gligorijević, *Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.542.*
- 98 以上、Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu, p.422.*
- 99 以上、ibid., pp.422-423。
- 100 以上、ibid., p.423。
- 101 以上、Gligorijević, *Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, pp.529-530, p.543.*

ところで、国王は1928年10月にフランスを訪問したが、これに関連してベオグラードの日刊紙『ブラウダ』は二つの注目すべき記事を発表した。一つは「外国から見た我が国の政局の行方」という見出しの記事であり、ユーゴスラヴィアの国王はすべての事項に最終決定権をもち、国政の基本的な方向を決めていると諸外国は見ていると

述べるものであった。もう一つは、「国王の仕事」と題する記事であった。それは、ベオグラードとザグレブの破壊活動によって国家が危殆に瀕していると述べた上で、「最近国民にとって明らかなのはその破壊的闘争によって国を台無しにしている職業的政治家に代わって国王がその役割を果たすときが来ていることだ。国王自らが仕事に乗り出せば、我が国の議会の活動はいったん清算し、正常なものに回復させる必要があることも明らかだ」と述べた。以上、Matković, *Povijest Hrvatske Seljačke Stranke*, p.280。

上記の『ブラウダ』は国王の側近の政治家ヴォヤ・マリニコヴィッチの経営する新聞だった。そこにこのような記事が掲載されるということは、国王の独裁制の接近を暗示していた。数日後にはイギリスの『タイム』の特派員は、ユーゴスラヴィアにはムツソリーニかピウツキーあるいはプリモ・ド・リヴェラのような人物が必要であり、国王はそのような人物としてペータル・ジフコヴィッチ將軍をすで見いだしていると述べていた。以上、*ibid.*, p.280。『タイム』の予想は当たっており、翌年早々に国王が独裁制を宣言したとき、首相に指名したのはジフコヴィッチであった。

102 以上、Gligorijević, *Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, pp.543-544。ダヴィドヴィッチは議会の解散と選挙の実施を認める発言をしたが、このとき農民・民主連合のマチェックは選挙の実施にたいした意味を認めず、危機の解決の場として議会を考慮に入れない立場に立っていたといわれる。なぜなら、選挙の結果、農民・民主連合が多数派を獲得できず、セルビアの諸政党が結束して国家制度の変更に対抗すれば現状は何も変わらないことになってしまうからであった。以上、Ljubo Boban, *Maček i politika HSS 1928-1941 1*, p.33。そうすると、マチェックにとって、農民・民主連合がダヴィドヴィッチに送ったエールは戦術的なもの以上のものではなかったことになる。

103 以上、Matković, *Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant*, p.223。

104 ただし、農民・民主連合は6月20日に殺人事件の舞台となった国民議会をボイコットし、8月1日にその議決機関としての正当性を認めない立場を表明していた。したがって、論理的にはこの議会の危機を解決するための協議に参加することはできない立場にあった。それゆえ、彼らは返信の電報にこう書き添えた。「農民・民主連合の議長は、国王陛下が国家の危機を直接的に解決しようとされるときに国王との接触を欲しなかったと批判を受けないようにするため、この陛下からの招請に応じることを決定した」。以上、Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p.359、Ljubo Boban, *Maček i politika HSS 1928-1941 1*, p.32。

105 以上、Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, pp.359-360、Matković, *Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant*, p.223。

106 以上、Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučičištu*, p.424、Gligorijević, *Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p.530。なおこのあと国家法を専門とする大学教授のスロボダン・ヨヴァノヴィッチが宮廷に呼ばれた。国王は政党を背景としない中立の政府の組閣を彼に指示するのではないか。ベオグラードの新聞記者と政治家はそう憶測したが、国王はただ専門的な助言を求めただけだった。以上、Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučičištu*, p.424。

107 以上、*ibid.*, p.424.

108 以上、*ibid.*, p.427.

109 以上、Gligorijević, *Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p.542.

110 8月1日決議以降の農民・民主連合の国際活動を概観すると、まず1928年8月23日にベルリンで開かれた国際議会連盟の大会があった。これは世界37カ国からの議会代表517名が参加した大規模な国際会議であった。ユーゴスラヴィアの議会代表は6月20日の事件の前に決まっており、農民・民主連合からは、ステェパン・ラディッチ、ユーライ・クルニェヴィッチ、スヴェトザール・プリビーチェヴィッチの3名が選ばれていた。しかし、農民・民主連合は6月20日の事件によって議会をボイコットしていたため、クルニェヴィッチとプリビーチェヴィッチはユーゴスラヴィア代表団への参加を拒否した。ところが、農民・民主連合の指導部はベルリンに出発したユーゴスラヴィアの代表団に対して対抗策をとらなければならないと考え、マチェックとクルニェヴィッチはクロアチア農民党の名で国際議会会議の執行部に電報を打った。その中で、彼らは6月20日に議会で起こった殺人事件を理由にベオグラードの議会の代表団にクロアチア人の議員が参加しなかったことを説明した。それだけでなく、6月20日の事件以降、ベオグラードの議会はクロアチアおよびクロアチア人を代表する集団ではなく、そのような不正常な議会から派遣されたユーゴスラヴィアの代表団はこの会議に参加する資格を欠いていると彼らは訴えた。このあとクルニェヴィッチは単独でベルリンに出発した。国際議会連盟の執行部はマチェックらの提起した問題を検討したが、ベオグラードからの代表団の参加資格を否定することはできないこと、ならびに一つの国からは一つの代表団しか参加できないという結論を出した。これによってクルニェヴィッチは公式に会議に参加する資格を認められなかった。クロアチア農民党は、ベオグラード議会の代表団の資格を無効にし、クロアチア議員の単独参加を認めさせることはできなかったが、ユーゴスラヴィアで起こっている問題に関して国際的関心を喚起することには成功した。クロアチア農民党が送った電報やクルニェヴィッチの会話はヨーロッパの新聞で報道され、反響を呼んだからである。クルニェヴィッチは個人的に他国の議会代表に6月20日に議会で起こった殺人事件を生々しく説明し、農民・民主連合の抗議行動に対する支援を求めた。これは他国の議会代表の中に驚きと同情を喚起し、クルニェヴィッチの活動は一定の成果を収めた。

1928年10月末、マチェックらクロアチア農民党の代表団は中欧諸国の農民政党の代表者会議に出席するため、プラハを訪問した。チェコスロヴァキアはユーゴスラヴィアと同盟関係を結んでいた国であったので、その政権関係者はユーゴスラヴィアの問題に大きな関心をもっていた。マチェックらの訪問はこの国の新聞では大きく報道されたが、政府関係者からは期待した支援を得ることができなかった。チェコスロヴァキア政府の関係者はユーゴスラヴィアとの同盟関係に配慮し、ザグレブとベオグラードとの紛争に立ち入ることを避けた。これには、マチェックに招待状を送ったチェコスロヴァキア農業党の党首で閣僚のミラン・ホッジャがベオグラード政府から強い抗議を受けていたことも影響していた。プラハでは、マチェックはイギリスの労働党党首のマクドナルドとの会談のチャンスがあった。しかし、これにユーゴスラヴィア政

府がロンドンの外交代表を通して介入し、イギリス政府はマクドナルドにマチュックと会わないように勧告した。ブラハからの帰途、ウィーンでマチュックはハンガリー政府代表のアポール男爵と会談した。この会談はアンテ・パヴェリッチ（後のウスタシ総統）がセットしたものだった。第一次世界大戦で失った領土の回復をねらうハンガリー政府はユーゴスラヴィアの弱体化を望んでおり、クロアチア人野党との関係樹立に大きな関心を抱いていた。しかし、ハンガリーはユーゴスラヴィアの仮想敵国であり、その政府代表との会談は余計な憶測を呼びかねないものであった。

農民・民主連合を代表し、もっとも広範な外交活動をおこなったのは新しく連合に加わったアンテ・トルムビッチであった。第一次世界大戦中にユーゴスラヴィア委員会を結成し、南スラヴ人の統一国家の形成をめざして連合国の中で活発なロビー活動を展開したトルムビッチは各国の政府関係者と豊富なコネクションを有することから外交活動には最適の人物であった。彼は1928年10月から12月にかけてパリとロンドンを往復する生活を送った。パリでは接触した人びとに対し、トルムビッチはユーゴスラヴィアの情勢を悲観的に語り、セルビア人とクロアチア人の対立が問題なのではなく、旧セルビア王国人と旧ハプスブルク領人（プレチャニン）という地域的な対立が問題であることを強調した。彼は、問題の解決策は国家の連邦制化であり、それが受け入れられない場合にはユーゴスラヴィアは共通の国王を媒介にした国家連合の形態が解決策になると訴えた。パリではトルムビッチは外務次官と二人の司令官と会うことができたが、外相とは会うことはできなかった。ちょうど同じ時期にユーゴスラヴィアの国王アレクサンダルがパリに滞在していたからである。アレクサンダルはフランスでは政府関係者の大きな信任を得ていた。それゆえ、トルムビッチと面会した要職者はユーゴスラヴィアの野党の主張に関心を示したものの、他国の政府と野党との関係にフランス政府が直接的な介入をすることには反対であり、もっぱら国王による善処を期待するだけであった。

ロンドンではトルムビッチはパリ以上に歓迎されなかった。イギリス政府はユーゴスラヴィア情勢に関心をもっていたが、外国の国内問題に対して不必要な内政干渉をしないというのが基本的立場であった。したがって、彼はここでもまた外相に会うことができなかった。イギリス外交部はトルムビッチを第一次世界大戦時の著名な政治家としてではなく、野党の代表として受け入れたためである。しかし、ロンドンではトルムビッチは政界に影響がある著名人を友人にもっていた。これには、R・W・シートン＝ワトソン、W・スティード、A・エヴァンズなどユーゴスラヴィア情勢に造詣の深い知識人が多かった。彼らに対し、トルムビッチは意を強くしてユーゴスラヴィアの政治危機の性格を説明した。ここでもまたトルムビッチは問題の所在はセルビア人とクロアチア人の民族対立ではなく、旧セルビア王国人と旧ハプスブルク人の地域的な対立であることを強調し、問題の解決策は国家の連邦制化か、共通の国王によって結ばれた国家連合になることを述べた。彼らは政府関係者よりもはるかにユーゴスラヴィアの危機に関心を示し、トルムビッチの説明を受け入れた。以上、Ljubo Boban, Maček i politika HSS 1928-1941 1, pp.23-27。

111 以上、Ljubo Boban, Maček i politika HSS 1928-1941 1, p.32。

112 以上、*ibid.*, p.34。なお国王の信任の厚いクロアチア人政治家であるマテ・ドリ

コヴィッチ（元クロアチア同盟の指導者で、独裁制導入後に組閣された内閣で社会政策相に起用された人物）は、国王の指示によって、1928年12月にマチェックと二度会談をおこなっている。国王はドリンコヴィッチを通して国王親政の意向をマチェックに示唆した。このときマチェックは、政党と議会政治によっては問題を解決することができず、選挙をやっても無駄だと考えていた。彼は事態を開閉するためには議会勢力によらない政府を形成することが最良の方法であり、それは独裁制的な政権になってもやむを得ないと考え、これを、ドリンコヴィッチを通して国王に伝えた。以上、Gligorijević, *Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p.545。

さらに独裁制の導入の口実となった1929年1月初めの政治指導者との協議についてもあらかじめシナリオが用意されていた。あるクロアチア人政治家（ミリヴォイ・デジュマン）は12月にドリンコヴィッチを通して国王にこう助言している。「政治危機が始まりましたら、国王陛下は48時間という短い期限を区切ってあらゆる議会主義的な解決を模索し、これが失敗に帰したあとで、非議会主義的な政権の形成をおこない、陛下はやむを得なくこのような措置に踏み切らざるを得なくなったという形にするのがもっとも賢明でありましょう」。国王はまさにこの助言に沿った行動をとった。以上、*ibid.*, p.546。

113 以上、Rudolf Horvat, *Hrvatska na Mučilištu*, p.416、

114 以上、Matković, *Svetozar Pribičević: ideolog-stranački vođa-emigrant*, p.219。

115 かつては激しく反目した二つの政党が同盟関係を結んで結成された農民・民主連合は、ステパン・ラディッチとスヴェトザール・プリビーチェヴィッチの二人の最高指導者が固い信頼関係で結ばれ、相互に譲歩しあうことでバランスと結束が保たれていた。しかし、6月20日の事件とその後のラディッチの死はこのバランスを崩し、農民・民主連合の内部に少なからぬ不協和音を発生させた。それには二つの要因があった。第一に6月20日の事件のあと、とくにラディッチの死後にクロアチア農民党の指導部は独自の行動が目立つようになった。それまではクロアチア農民党と独立民主党は別々の会議を開くことはなかった。しかし、ラディッチの死後は、両党は独自に決議を採択し、その上で農民・民主連合の合同会議を開いて共通の決議を採択する手続きをとった。第二にそれにもかかわらずプリビーチェヴィッチはクロアチア農民党の行動に対し寛容な態度を続けたが、このことに対し独立民主党のメンバーから不満の声がたびたび上がるようになったことである。彼らはプリビーチェヴィッチの態度が独立民主党の原則的立場の否定に結びつかないかを警戒し、プリビーチェヴィッチにしばしば苦言を呈した。

農民・民主連合の内部の不協和音は1928年8月末の国際議会連盟の大会への代表団の派遣をめぐって表面化した。農民・民主連合はユーゴスラヴィアの議会代表団に加わらないことを決めていたが、クロアチア農民党の指導部は農民・民主連合の会議に諮らざりてユーゴスラヴィアの議会代表団の代表資格を問題とする抗議文書を国際議会連盟の指導部に送り、さらにイワン・クルニェヴィッチをベルリンに派遣した。クロアチア農民党の国際議会連盟への対応に対し、独立民主党のスヴェティスラフ・ポボヴィッチは連合のパートナーに何の連絡もなかったと不満をにじませるコメントをセ

ルビア系の日刊紙『ポリティカ』に発表した。これに対し、クロアチア農民党議長のマチェックは、クロアチア農民党はクロアチア人を代表し、農民・民主連合はクロアチア人だけでなくすべてのプレチャニンを代表すると述べ、クロアチア人代表としてクルニェヴィッチの派遣を決めたクロアチア農民党の行為を正当化した。国際議会連盟に送った電報については、クルニェヴィッチの出発前に作成してプリビーチェヴィッチには正確な内容を伝えることができなかったが、電報を送ることとクルニェヴィッチを派遣することはプリビーチェヴィッチに伝えていたと釈明した。

この回答に満足しない独立民主党のブリヴィスラフ・グリソゴノはマチェックとプリビーチェヴィッチの二人の代表に対し、抗議の書簡を送った。その中で彼は、最近の指導部は農民・民主連合の内部にある重大な誤解の存在に十分な注意を向けていないと指摘し、農民・民主連合の政策が強固な基礎の上に構築されていないことを警告した。彼によれば、農民・民主連合の中には6月20日の事件以前から危険な傾向があった。それはセルビア人の存在を無視し、クロアチア人の権利やクロアチア国家だけを強調する一部のメンバーの態度である。このような傾向が続けば、故ステパン・ラディッチの大所高所に立った判断と寛容な精神によって実現した農民・民主連合の協力関係は危殆に瀕することになるとグリソゴノは主張した。彼によれば、ベルリンへの代表派遣に関する問題はこの傾向の一つの表出にすぎない。彼はマチェックの発言を念頭に、これはクロアチア農民党だけの問題だとする見解には同意できないと述べた。それぞれの党は勝手に独自の行動をとってよいというのはこの連合の結成の精神に反すると自分は考える。こう述べて、グリソゴノは、農民・民主連合の議員総会を招集し、この問題の見方を明らかにするとともに、明確な手続きを確定することを指導部に求めた。

しかし、農民・民主連合の議員総会は開催されず、その代わりに8月23日に幹部会がリュブリャナで開催された。この幹部会では、国際議会連盟のベルリン大会に関してクロアチア農民党の指導部がとった手続きが取り上げられた。議論の結果、採択された決議は、クロアチア農民党がとった行為を農民・民主連合は承認するとしたが、同時にこの行為はもっと強固なものにすべきだと注文がつけられた。これ以外の点では幹部会の結論は農民・民主連合の結束を強調する方向に収斂した。バオグラードから派遣された議会代表が国家を代表する資格がないという農民・民主連合の見解をまとめるため、特別の委員会が設置され、委員が選ばれた。採択された決議はまた、国民の一部しか代表しない国民議会の代表団がベルリンの国際議会連盟の大会に参加することに反対するとしたクロアチア人の議会代表(＝クロアチア農民党)がおこなった8月20日付けの抗議を支持し、これに連帯すると述べていた。

プリビーチェヴィッチは農民・民主連合の議長の一人として決議をまとめたが、クロアチア農民党の行動に対する彼の寛容な態度には独立民主党の議員の中に不満をもつ者がいた。それゆえ、8月下旬、幹部会に参加しなかったグリソゴノらの提案により、独立民主党は独自に議員総会を開催した。会議の参加者の中にはクロアチア農民党の分離主義的な行動を厳しく批判する者がいた。さらにこのような傾向を容認している執行部の方針は誤った寛容さではないかという疑問が投げかけられた。執行部に対する批判にプリビーチェヴィッチは、クロアチア農民党の行動を決して見過ごし

ているわけではないと反論した。彼は自分の行動を「戦術」としてこう弁護した。クロアチア人大衆の信頼を得ることは絶対必要であり、クロアチア農民党に細かな釈明を強要することは得策ではない。それは農民・民主連合の結束を台無しにするからだ。独立民主党はそのイデオロギーに基づいてポジティブな行動をとる必要がある。プリビーチェヴィッチは最後にこう述べた。「我々が自分たちのイデオロギーを否定するなどという杞憂をもつ必要はない」。独立民主党の議員はこの言葉に満足し、党首のプリビーチェヴィッチに信任を表明した。以上、Matković, Svetozar Pribičević: *ideolog-stranački vođa-emigrant*, pp.213-216。

もっとも、これで問題は収まらなかった。その後もマチェックを中心とするクロアチア農民党の指導部は実質的には連邦制の導入を求める発言を繰り返し、これに対してプリビーチェヴィッチは批判を加えず、クロアチア農民党と独立民主党の見解の不一致を極力表面化させないように努めた。

それゆえ、独立民主党の一部にはプリビーチェヴィッチの態度に対する不満がくすぶっていた。この不満は1928年12月1日にザグレブで起こった事件をきっかけに表面化した。独立民主党の一部の議員（グレゴール・ジェラーフ、スヴェティスラフ・ポボヴィッチ、グリソーゴノ、スルジャン・ブディサヴレヴィッチ）は軍隊を侮辱したクロアチア人の若者の行為を非難した。しかし、プリビーチェヴィッチはデモの参加者はおもったもな権利があると述べ、党の機関誌も彼らの行為を軍隊に対する侮辱だとする見方には保留を表明した。グリソーゴノはこの件についてプリビーチェヴィッチを非難し、離党も辞さない構えを示した。以上、*ibid.*, p.217。

なおプリビーチェヴィッチと対立したグリソーゴノはダルマチア沿岸の都市スプリットの選挙区の選出の議員であった。ダルマチアはイタリアの侵略に対する脅威から、ユーゴスラヴィア国家に対する安全保障上の期待が大きい地域であった。それゆえ、彼は独立民主党の党是である単一国家・単一国民主義を強く信奉し、連邦制の導入を求めるクロアチア農民党幹部の発言に大きな反感をもっていたと推測される。